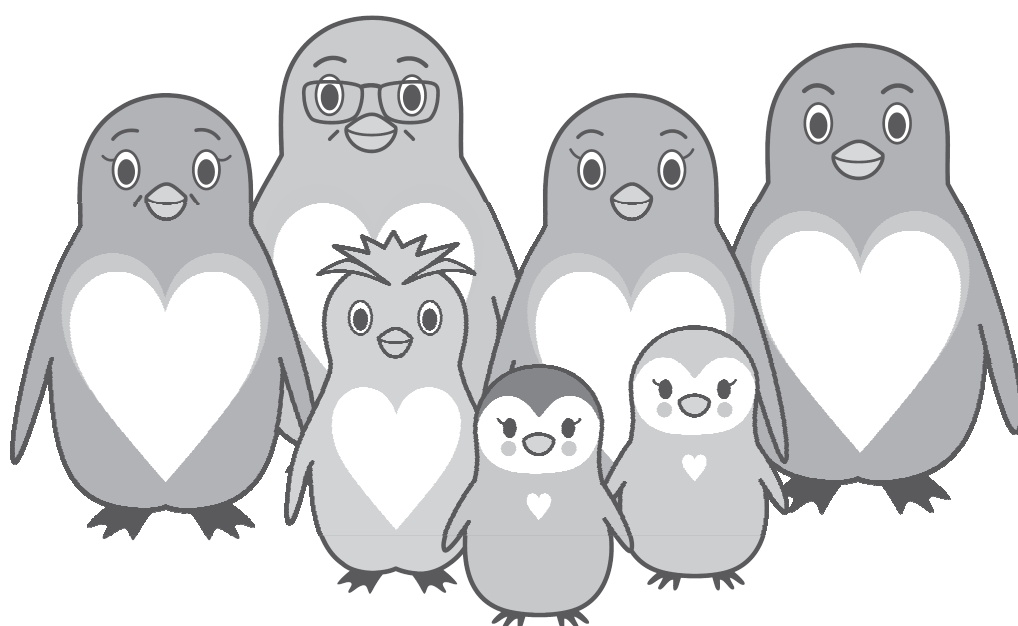


養育家庭（里親）体験発表集
（令和4年度）



東京都里親制度普及啓発キャラクター

「さとペン・ファミリー」

 東京都福祉局子供・子育て支援部

「養育家庭（里親）体験発表集」の発行に当たって

都内には、様々な理由により親元で暮らすことのできない子供が約 4,000 人います。そのような子供を、自らの家庭に迎え入れ、家庭的な環境で育てているのが「里親」であり、東京都ではその制度の普及に取り組んでいます。「養育家庭」は里親制度の一つであり、養子縁組を目的とせず、一定期間子供を育てる家庭です。

毎年、東京都は各区市町村と協力し、都内各地で養育家庭（里親）体験発表会を開催しています。この冊子は、令和 4 年度に開催された体験発表会において、養育家庭（里親）の皆さんに発表していただいた内容を要約し、冊子にまとめたものです。

養育家庭（里親）になろうと思ったきっかけ、児童の委託されていた時の思い、交流・委託中の思いがけない出来事や慌ただしい日々の様子などが描かれています。

また、委託後の子供の赤ちゃん返りや試し行動などの問題や実子と委託児童の関係、子供を途中から育てることゆえの悩みについても語られています。

しかし、そういった御苦労の中にも、子供が少しずつ家庭になじんで心が通じ合っていくのが実感でき、養育家庭（里親）をやっていて良かったという話や、悩んだ時に養育家庭（里親）仲間や児童相談所の職員など周りの人から支えてもらった話など、養育家庭（里親）だからこそ味わえる子育ての素晴らしさにも触れています。

より多くの都民の皆様にお読みいただき、都内における養育家庭（里親）に対する理解を深めていただく契機になれば幸いです。

令和 5 年 9 月

東京都福祉局子供・子育て支援部育成支援課長

岡 本 香 織

目 次

1	家族として共に育ちあう・・・・・・・・・・・・・・・・	2
2	優しく見守って、帰る場所を空けておいてほしい・・・	6
3	堂々と生きなさい・・・・・・・・・・・・・・・・	8
4	高校卒業後のその後を見据えて ～本人の気持ちを真ん中に～・・・・・・・・	10
5	毎日が新たな始まりの日々・・・・・・・・	14
6	預かる期間は様々でも家族みんなで力を合わせて・・・	16
7	里子を受け入れて自分も成長することができた・・・	20
8	養育の結果は長い目で見ないと分からない・・・・・・・・	24
9	どうしてもあなたと暮らしたくて、 暮らせて幸せだよと言いたい・・・・・・・・	28
10	里親制度、里親家庭というものが ごく当たり前の環境になってほしい・・・・・・・・	32
11	自分のできる範囲で手を差し伸べて・・・・・・・・	34
12	子供が自分の頭できちんと考えられるようにすることが 子育ての目標・・・・・・・・	36
13	現在は反抗期、成長の証 ～どんな大人になるのか楽しみ～・・・・・・・・	40
14	里親になって私たちの人生は豊かになった・・・・・・・・	42
	巻末資料 体験発表会アンケート結果・・・・・・・・	46

養育家庭（里親）体験発表会へようこそ！

この度は、体験発表集を手にとっていただき、ありがとうございます。

本書は、令和4年度の養育家庭（里親）体験発表会の発表者の方々のご協力のもと、当日の発表内容を要約し、編集したものです。

より多くの方々に、里親制度を知っていただき、ご理解と共感を得られることを、何よりも願っています。

それでは、里親さんと子供たちの生活の一部をご覧ください。

1 家族として共に育ちあう

発表者：里親（60代女性）／里親歴：24年

家族構成：里親、委託児童（高校3年生のR君、小学2年のY君）、

元委託児童のMさん（自立）、実子（自立）

私は短大を卒業して、保育士として神奈川県内の児童養護施設に勤めました。今から四十数年前の話ですが、現在のように子供の背景、気持ち、将来を大切にする養育ではなく実親の代わりに育てるといったものでした。平等が第一とされ、個人の事情に配慮もされていませんでした。当時から、いつか子供個人に向き合って寄り添える里親をしたいなと思っていました。

結婚してなかなか子供に恵まれず、6年目にやっと女の子に恵まれました。私も夫も家族は多いほうが楽しいと、娘が幼稚園に入園したときに里親登録をしました。娘はきょうだいができる大喜び、夫は娘と差をつけてしまわないだろうかという不安があったようでした。

娘が小学校1年生のときに当時2歳4か月のMちゃんを紹介され、乳児院に面会に行きました。言葉が少し遅れていて、大人に対する警戒心が強く、保育士さんにしがみつき、こちらを見ようともしませんでした。2度目は娘と2人で行きましたが、面会室のドアを指して保育室に戻りたいと2時間泣き通しました。それから週1回、夏休みの暑い中、電車に乗り往復4時間をかけて1か月半通いました。娘は妹ができる喜びにプールへも行かず毎回ついてきました。交流を続けていく中で、やっと泣かなくなり、「乳児院周辺の散歩」や「ファミレスでのランチ」、「電車に乗って我が家へ」と徐々に交流を深め、外泊を繰り返して委託となりました。初めての日の夜は寝かせようとするとうと4時間泣き続け、その後泣き疲れて眠りました。

8月末に我が家に来て、10月初めに乳児院から運動会の招待状が届きました。ワーカーさんからはやっと慣れたところで連れて行かないほうがいいかもと言われましたが、我が家に来たのは幼い本人の意思ではなかったもので、一度乳児院に行ったほうが納得できるのではないかと思います、連れて行くことにしました。園につくと担当保育士さんに走り寄り、友達に混じって競技に参加しながらも、何度も何度も振り返り、私と娘がいることを確認していました。会が終わって私が帰ろうと手を出すと、自然に手を握り、先生や友達にさよならをして帰ってきました。そのときの彼女の心の中がどんなふうだったのか、計り知

れませんが、胸が熱くなりました。

幼稚園の入園は、我が家に来るまでの2歳4か月分を親子でべったりと過ごしてから社会生活に送り出そうと、年中になるまで待ちました。この頃には、誰にでも素直に甘え、友達もたくさんでき、眠くなったときとトイレのときだけ私の元に戻ってくるたくましい子になりました。

かわいくて、かわいくて、たまらなかったのが、生みの母ではないことを伝える「真実告知」は不安でした。彼女の頭の隅っこでは、乳児院で育ったことや里親の集まりに連れていかれる中で何か感じてはいるものの、私から生まれたと知っているようでした。本を読んだり、研修会で学ぶ中で、里子は親の事情でそうなたただけで何にも非はなく、里子であることを仲の良い友達に言えなかったり、彼氏に打ち明けられないことがないように、里親自身が里子であることを周囲に隠さず、生きていくことが大切だと気づきました。

生みの母ではないことは、ほんのちょっと理解できる4歳のときに伝えました。彼女と2人のときに膝の上に乗せて、「Mちゃんは、お母さんから生まれたんじゃないよ、Mちゃんのママから生まれたの。Mちゃんのママは一緒に暮らせない理由があって優しい先生とお友達がいるホームに預けたんだよ。お母さんは、Mちゃんという子がホームにいると聞いて家族になりたくて、お父さんとお姉ちゃんと会いに行ったの。Mちゃんが慣れてくれて笑ってくれてうれしかったよ。これからはずっと家族だよ。」と話しました。彼女は黙って聞いていて、その後2人でお風呂に入りました。特に変わりはなく、少し甘えん坊になったかなと思うくらいで過ぎましたが、翌日からは質問をしてくるようになりました。

「本当のママはどこにいるの?」、1か月後には「お姉ちゃんは誰から生まれたの?」。5歳になると「私のママは私のこと好きじゃなかったんだね」。6歳になると「ママはどうして私をあそこに入れたのかね、お金がなかったのかね」。年齢が上がるにつれ「お母さん、ホームに来て、どの子にしようかなって見渡して私に決めたの?」、「お母さん、私がここに来てから、私のこと嫌だって思ったことある?」と質問はいつも唐突でした。それだけにいつも心の中に実母さんへの疑問があったのだと思います。

彼女が小学校2年生になった頃、それまで妹をかわいがり、母までも妹に譲っていた娘が家庭内で暴れ始め、小学校6年生で不登校になりました。私は里子への影響を考え、児童相談所の心理の方に面談をお願いしました。彼女は家族の絵を描いてくれました。その絵には楽しそうにお花にお水をあげたり、歌ったりしている家族全員プラス愛犬が描かれていました。面談の結果は「Mちゃんはお姉ちゃんが優しかった時のことを覚えていて、

もう家族の一員になっています。お姉ちゃんのことはMちゃんを含む家族全員で乗り越えてください、措置変更はMちゃんを不安にします。」とのことでした。

その頃、私は養育家庭の体験発表をいくつかの会場で行いました。町田市の市民大学で話したとき参加者から受けた感想は「実子さんがかわいそう、いいことばかりではないんですね」というものでした。相談に通った町田市の教育センターのカウンセラーからも、「里親を辞めなければ娘さんは歩き出せないでしょう」と言われました。

娘は過眠症で、苦手なものがたくさんあります。コミュニケーションも苦手で、臆病で、怖がりですが、周囲が見える心の優しい子です。多分ここで里親を辞めたら自分を責めるでしょう。家族の一員になってくれた彼女も傷つくでしょう。このときの私の力になってくれたのは、「わたしたち里親家族！」という本の中にあつた仲間の里親さんの実子さんの一文でした。「私たちのすべきことは、里子の手を握り、現在地が分からなくとも、進むべき道が分からなくとも、足をがむしゃらに前に進めることなのだと思います。もしかしたら足を踏み外すかもしれない。道は険しくなるかもしれない、迷子になるかもしれない。だけどそんなときに後悔しないために絶対につないだ手だけは離してはいけません。」この言葉に支えられて今日があります。

娘はその後、中学では3年間で7日間だけ登校し、通信の高校に入学するも1か月と少しで行くことが出来なくなり退学。17歳では自分で探したバイトを2か月で辞め、18歳では別の通信制の高校に入学し、21歳で卒業しました。その後、専門学校に入学するも1か月で行けなくなりましたが、アルバイトで入ったコンビニでの努力が認められ、現在は大学病院内の2店舗の店長としてストレスを抱えながらも必死に頑張っています。

2人目の受託は、娘が14歳、Mちゃんが10歳のときに話がありました。3歳10か月の男の子（R君）で、家族4人で乳児院へ面会に行きました。R君は赤ちゃんぽくてオムツをはいていました。昼も夜もにこにこしていて普通とは違う感じがしました。我が家に来てからも優しくしてくれる人なら誰でもよくて、その時々で知らない人について行ったり、私たち家族の元に戻るのを嫌がることもよくありました。それは家族にとってはとてもつらいことで、R君が家族という枠を認識してくれるのに2年かかりました。

R君は幼稚園も小学校も元気よく通い、運動神経もよかったのでいつもリレーの選手でした。優しくて我慢してしまうことが多く、怒りをためて爆発させてしまうことも時々ありました。成績は今一つでしたが、毎日元気に登校していくので安心していました。

ところが、中学に入学した途端に勉強につまずき、先生を嫌がり、携帯電話のことで友

達とトラブルになり、朝起きられない、気持ちが悪い、耳鳴り、下痢などの症状が出て、学校に行くことができなくなりました。どんどん元気がなくなっていくので、毎日楽しいこと、昼夜逆転しないようにしようと、バッティングセンター、アスレチック、映画、ドライブ、釣堀、ランニングに連れ出して、教育センター、発達心療クリニック、小児科、カウンセリングに通いました。愛の手帳の4度も取得し転校もしました。特別支援学級から特別支援学校高等部に入学すると、高卒扱いにはならないので、将来の選択が広がるように得意な体育の授業のある私立の通信制高校に入学しました。R君は現在高校3年生です。柔道整復師を目指して、専門学校に進学の予定で、20歳まで措置延長をしました。

3人目は、3年半前に一時保護で、4歳10か月の男の子、Y君が来ました。小さくて、児童相談所の人に抱っこされてオムツをしていました。目じりには涙の乾いた跡がありました。言葉も何を言っているか分からず、全身アトピー性皮膚炎のかき壊した傷だらけで常に体のどこかをかいていましたが、昼も夜もにこにこして泣くこともなく、素直でかわいらしく、転んでも、いすから落ちても、泣かないことが不思議でした。

2か月後、一時保護から里親委託になった頃から、暴言暴力が始まりました。回らない口で「黙れ、おめえ、てめえぶっ殺してやる、ふざけんな、出ていけ、じじい、ばばあ」とすごみ、食事が気に入らなければ投げ、思いどおりにならなければ物を投げ、低身長で小柄なのにすごいパワーで、常に怒りを抱えているようでした。

言葉の不明瞭さも気になり、就学前に友達に追いつけるように、こども発達センター、言語聴覚士、教育センターに相談しました。現在、小学校では普通級に在籍し、サポートルームを活用しています。学校では頑張っている反動か、家ではいつも怒っていて、発達心療クリニックに通院し、服薬をしています。「聞いているのか、ばばあ。てめえがやれ。」と、思い通りにならないと怒りをあらわにする毎日です。大変なことばかりですが、家の中で遊んでいるとき、眠るとき、泊まりに行くときなど、いつも私のオレンジ色のTシャツを握りしめているかわいいところもあります。

里親を続けてきて、産んでいないのに何人もの子供に恵まれ、泣いたり、笑ったり、苦しんだり、辛かったり、忙しかったり、いろんなことがありました。ですが、全部まとめて幸せのほうがプラスで上回っています。里親里子に対する支援体制は経済的にも制度的にも物質的にもメンタル面でも、二十数年前より格段に整ってきています。分子の社会的養護の子供たちは増えているのに、分母の里親が増えていないのが現状です。未来の宝である子供たちが笑顔になれるように、安心安全でいられますように願っています。

2 優しく見守って、帰る場所を空けておいてほしい

発表者：元委託児童（20代女性）／里親宅で過ごした期間：2歳～20歳

家族構成（当時）：里親、実子、委託児童

私は現在24歳、社会人5年目で、里親さんのおうちの近くで独り暮らしをしています。私がママと一緒にいたのは1週間ほどでした。病院を退院するときそのまま置いて行かれ、その後は乳児院に行き、2歳4か月のときに里親さんのところに来ました。

里親さんの家には実子のお姉ちゃんが1人いました。里親さんの家に来た時の記憶はもちろんありませんが、お母さんから話を聞くと、とても仲の良い姉妹だったそうです。

私も、お母さんとお姉ちゃんがやっていた和太鼓クラブに入り、高校生までやっていました。お祭りや幼稚園、保育園、老人ホームなどボランティアで演奏をしたり、夏休みには盆踊りで毎週末太鼓をたたいていました。海外で太鼓をたたいたこともあり、小1でハワイ、中2で上海に行きました。とてもいい思い出です。家族ぐるみで仲良くなった和太鼓クラブのお姉ちゃんたちとは、今でも仲良しで、月1でご飯に行き相談に乗ってもらっています。和太鼓を習ったことで大人との関わり方や、みんなの優しさ、温かみを知ることができ、家族以外の頼れるところもできました。

中学生ではバスケット部に入部しほぼ毎日練習の日々でしたが、中3になり部活も引退し、うちにいることが増えると、お姉ちゃんとけんかすることもあり、手を出されることもありました。お姉ちゃんのことを嫌になり、同じものを食べるのも嫌なときがありましたが、このうちにいたくないと思ったことは一度もありません。嫌なことがあってもお母さんが味方でいてくれたし、お母さんもつらい思いをしているなと思ったので、仕方がないことだと思いました。里子という自覚はなく、本当の家族として、お姉ちゃんと向き合っていたと思います。今はお姉ちゃん自身が仕事をしていて落ち着いたということもありますが、仲の良さを取り戻し、旅行に行く計画も立てています。

中3の冬休みに初めてママに会いました。会うことになった経緯はママが児童相談所の方に連絡をして私に謝りたいということでした。当日は少し緊張していましたが、お母さんと一緒に出かけられること、私のために用事に付き合ってくれることがうれしく、頼もしかったのを覚えています。ママは背が高く大きいというのが第一印象でした。緊張していてあまり話したことは覚えていないですが、私の赤ちゃんのときの写真を見せてくれました。お母さんのところに戻り、ママと一緒に撮った写真を見ながら、「やっぱり似

ているね、会ってよかったね」と言われ、「まあ会ってよかったかな」と思いました。

私がママと会って思ったことは、他人と会ったという感覚で、やっぱりお母さんは今のO（里親）さんしかいないと改めて思いました。

パパのことを聞くためにママともう一度会う機会を作ってもらうことにしました。聞きたいことを事前にお母さんと考え、パパについて質問をしました。パパは私が生まれてくる前に亡くなっていたこと、パパが亡くなっていたから育てられずに病院に置いて行ったことなど、初めて知ることが多くありました。戸惑いながらも仕方ないかと腑に落ち、そのままママの家で育っても絶対お金もないし、苦勞したろうなと思いました。「やっぱり、今の家に来てよかったな、今の家がいいな」と痛感しました。

専門学校に上がり、1つ戸惑ったことがありました。それは名前を通称名のOから戸籍名のSに変えたことです。専門学校から戸籍名に変わったので、思わず通称名を言ってしまう、友達が「？」となってしまうこともありました。それでも半年ぐらいすると戸籍名にも慣れ、名前に関する問題もクリアできました。少し苦勞した面もありましたが、幼い頃から通称名で普通の家族として過ごせてよかったなと思います。

社会人になり里子は大変だなと思うことがありました。それは自立するということです。私は幸いなことにお母さんは優しく、今でもうちに帰ったら遅くてもご飯を作ってくれます。一緒に買物に行って、お菓子やカップラーメンを勝手に買い物かごに入れても「えー」といいながら、買ってくれます。ほかの家庭では、うちを出た里子とはあまり関わらないこともあると聞きますが、私はいつになっても親子のような関係で甘えさせてほしいなと思っています。家を出てから、保険のことや年金、NHKの集金、税金、アパートの手続等分らないことがたくさんあります。普通の家庭の子供だったらやらないことも、自分でやらなくてはいけないことがあります。社会人になったばかりの子からしたら、訳が分からないことばかりなので、やはりそういうときはお母さんの助けが必要です。今までも何があっても味方になり、私を信じてくれ、間違ったことがあると指摘してくれます。私が痛い目にあって帰ってきても優しく迎えてくれます。私もいつかそんなお母さんになりたいし、誰にでも紹介したい自慢のお母さんです。

もしも今の里子さんとうまくいっていないことや、分かり合えないことがあってもいつか分かり合え、里親さんに感謝する日は来ると思っています。今は無償の愛で接してください。話を聞いてあげてください。優しく見守ってあげてください。帰る場所を空けておいてください。それだけで私たちはここに生まれてよかったなと心から思います。

3 堂々と生きなさい

発表者：元委託児童（20代女性）／里親宅で過ごした期間：2歳半～21歳

家族構成：里親、委託児童、実子（自立）

今から話すことは、内容が少し暗いかもしれませんが、しかし、皆さんと一緒に考えてほしいです。里親制度をちゃんと理解していますか。里親制度を特別視していませんか。里親、里子を一人の人間として見ていますか。私は、この体験発表を何年間も断り続けてきました。自分自身の生き立ちについて振り返ること、それを皆さんに伝えることが怖かったからです。その中で、ある友人が「面白い人生だ」と笑顔で話してくれたことがきっかけで、この場に立つことを決意しました。

私は2歳半から里親さんに引き取られ、21歳の就職を機に自立しました。里親さんの毎日は、私にとって、実子と変わらない当たり前の生活で、楽しい日々でした。その中で、何度も自分自身の生き立ちについて考えること、他人に伝える機会がありました。すると、皆さんは決まって、「かわいそうな子だね。」「今までつらかったね。」と言うのです。親がいないこと、自分が生まれたルーツ、母親の顔さえ分からないことに負い目を感じ、当たり前だと思っていた日々を壊されたような気持ちでいっぱいでした。

里親さんが本当の親でないことは、私の年齢に合わせて少しずつ教えてくれました。最初は幼いながらも衝撃が強く、その事実を信じられませんでした。初めて年賀状が私宛に届いたとき、名字が違うことに違和感を覚え、通称名を使うことにしました。そうすることで、里親さんの子供として当たり前の日々を過ごせると思ったからです。小学校に上がるとき、違う名字であることがばれるのが怖かったため、通称名で通うことを決意しました。しかし、学校で生き立ちを振り返る授業のとき、両親がいないこと、名字が違うことがばれると、いじめられました。でも、いじめより、かわいそうな子、家族がいない子として哀れんだように見る大人の目が、すごく怖かったです。生きてきたことを否定されたように感じ、自分なんて生きていていいのかなとも思いました。

里親、里子は本当に特別でしょうか。普通の家庭と何か違いはあるのでしょうか。私は普通に生きているだけです。里親さんの子供として当たり前の日々を送っているだけで、特別ではありません。普通の家庭と何一つ変わりません。里親制度に限ったことではありませんが、大人が特別視することが、その子自身の心に深く突き刺さります。皆さんは、思い当たる節はありませんか。

大人になっても、そのような経験はありました。専門学校を受験したときの面接で、志望理由などは一切聞かれず、興味本位で「本当の親の顔を覚えている？」など質問され、最後には「かわいそうな子だね、立派に育てて大変だったね。」と吐き捨てるように言われました。私は深く傷つき、泣いて帰りました。そのときに、里親さんに「堂々と生きなさい。」と言われました。次の受験では考えを変え、「不合格ならもう一生会うことはないから、堂々と里子であることを言う。」と決めて面接に臨みました。里親さんは「堂々と胸を張って行ってきなさい、私たちは味方だから。」と背中を押してくれました。面接で、いつか里親制度が知れ渡り、説明しなくてもいい社会になること、通称名で通わなくてもいい時代が来ることを願っていると訴えました。そのときの面接官は、私を一個人として真摯に向き合ってくれました。私はその専門学校に合格し、看護師の夢へと一歩近づきました。

「堂々と生きなさい」、それは、自由に小さな夢を持って生きること、負い目を感じず生きることだと思っています。その言葉に何度も救われてきました。そして、友人に言われた「面白い人生」という何げない一言は、私自身を肯定してくれるものでした。私は一人ではありません。私を肯定してくれる里親さん、友人がいる。それだけで十分です。

これまでの出会いの中で、尊敬している人がいます。高校生の頃に出会った担任の先生です。進路について話した際、自身の生い立ちについて泣きながら話した記憶があります。そのとき「じゃあ自分の将来はどうなりたいの？」と、ただひたすら質問されたのを覚えています。私自身と向き合ってくれた気がしました。進学するなら学費は自分で払うと決めていましたが、金銭面的にすごく悩んだ時期でした。その先生は、給付型の奨学金や学費が安い看護学校を調べてくれて、そのおかげで進学することができました。

生きていく中で、興味本位で生い立ちを深く聞いてくる人、ひいき目で見えてくる人、特別視してくる人は、もちろん多かったです。しかし、今振り返ってみると、私自身を見てくれる人はいましたし、周りにとっても恵まれたと思っています。施設育ち、里親育ちの皆さんも一人ではありません。堂々と生きているあなただからこそ、あなたを肯定してくれる人に必ず出会えます。そして、一人でも多く里親制度のことを知ってもらいたいです。一生懸命生きているその子自身を肯定し、向き合ってほしいです。里親制度というくくりはあるけど、里親、里子は普通の家庭と何も変わりません。特別ななんかじゃありません。一人の人間としてその子自身を見てください。一人一人がその気持ちであれば、里親、里子関係なく、当たり前の日々が過ごせると思います。その未来を、私は願っています。

4 高校卒業後のその後を見据えて ～本人の気持ちを真ん中に～

発 表 者：里親（40代女性）／ 里親歴：3年

家族構成：里親、委託児童（高校3年生の女の子）、実子3名

里親になったきっかけは、児童相談所で働いたり、社会的養護のアフターケアと呼ばれる分野に関わったりしながら、もう少し誰かと深く共に生きることにチャレンジしてみたいと思ったからです。「家族とは」ということを考え続けてきた私は、なるべく多様な人や価値観に触れて育つことが健全なのではと思っていました。シェアハウスをしたり、自宅を地域に開放したり、とにかく今も人の出入りが多い我が家です。

私がアフターケアの仕事をしていることもあり、里親としての受入れは、引受先が少ない高校生や、特定妊婦と呼ばれる若年の妊婦さんを希望しました。

今は高校3年生を預かっています。一時保護から里親委託になった女の子で、大学に進学したいという気持ちを強く持ってやってきました。最初の1か月間は一時保護期間でしたので、学校には通えますが、寄り道はできず、スマホも児童相談所に預けている状態でした。この時期は、逆に生活リズムを整えて勉強する習慣を取り戻す時間になったのではないかと思います。そして学校から帰ってきた夜に、みっちり話し込むことができたこの時期があったことが、お互いの信頼関係のベースになったのではないかと今は思っています。

初めて顔を合わせたときに伝えたことがあります。「安心して生活できること、学校や大学に行きたいという思いを応援したい。全ての希望を叶えてあげられないわけじゃないけど、まずは伝えてみてほしい。頭ごなしに否定したり、理不尽に怒ったりはしないから。一緒に考えていきたい。」。

その後、「塾選びと、本人の交渉」という課題が出てきました。高校3年生なので、すぐに大学受験に向けて態勢を整えていくことになりましたが、生活の混乱もあって学校の成績も落ちていました。塾に通うことにしましたが、本人が一番行きたいと言っていた塾は料金が高く、児童相談所からの支弁では賄えません。本人は、ほかの塾に通うことに納得がいかなかったようでした。

そこで、率直にお金のことを伝えました。「正直、一般の家庭だったらここまでは出せない。簡単にいいよと首を縦には振れない」。そうしたら、「これ申し込めませんか」と本人が、渡してきたものがありました。それは社会福祉協議会が出している受験費用の貸

付けのリーフレットでした。これは貸付けなので返済が必要なのですが、どこかに受ければ返済免除になるものでした。実は中学3年生のときに、本人がこれを利用して個別指導の塾に3か月通って、高校受験に成功したという体験があつてのことでした。

でも、この貸付けをもってしても塾代には足りないのです。すると、本人が「里親に支給される生活費から出してもらえませんか」と言ってきました。このエピソードを聞いた関係機関の方からは、「まあ、何とぜいたくな」という第一声をいただいたこともありますが、私は本人がこの交渉をしてきたときに「お、やるね」と内心ニヤリとしました。自分で交渉するということは、社会に出てから生きていくときに、必ず必要な大事な力だと思っているからです。どうせ言ったって駄目だと諦めずに、駄目元で言うしてみる。私たちへの信頼があるからこそ言ってくれたのかもしれないと思いました。

ただ、お金のことがあるので、少しだけ保留にしました。その間に第1希望の個別指導の塾代と、近所のいわゆる一般的な塾の諸費用を全部書き出してみました。そうしたら、実は総額は大して変わらないことが分かったので、「少し足は出てしまうけれども、里親に支給される生活費のほうから出すよ。第1希望の個別指導の塾に通うこともできるよ」と伝えました。

これは、「やりたいようにやらせてあげるよ」ということではなくて、本人がまず資料を持ってきて、私たちに交渉をして、いろいろなやり取りを重ねた上での結果です。こういったプロセスを大切に積み重ねていくことが大事な事だと思っています。

次に、「アルバイトをどうするか。迫るお金の問題」についてお話しします。児童養護施設や養育家庭で長く暮らしている子は、大体アルバイトなどでお金をためてから措置解除の日を迎えることが多いと思います。

ただ、我が家の里子は貯金が全くない状態で来ました。アルバイトで貯金を作れない分、お金をどうするか考えて、文科省が出している修学支援新制度への申請と社会的養護の子たち向けの民間の奨学金になるべく多く申込みをしています。

私だけでは情報を取りこぼしてしまうので、里親支援機関の方に協力をお願いしています。実は里子の志望する学科は学費が高くて、公的な制度だけでは授業料が足りません。お金については、里親支援機関の方がパターンごとに詳細なシミュレーションをつくってくださり、不安が具体的になって対処の仕方も考えられるようになるので、とても助かっています。

そして、「いざ志望校選び、受験生の親として」です。勉強は本人しか頑張れません。

私たちができることは後方支援、大学選びのサポートです。

高校の先生からは、「浪人はできますか」と聞かれましたが、社会的養護の子供たちに浪人生活までは保障されていません。本人の強い意向がある場合は、高校卒業後に自立援助ホームという別の施設に移って、アルバイトをしながら勉強を続けることもあるかと思いますが、現状は、とにかく現役で入れるところに入るか、就職するかを選択肢だと思います。

そして、「高校卒業のその後を見据えて」です。高校3年生での委託ということで、ここを出る日もすぐそこに見えています。やらなければいけないことがたくさんあり、ゆっくりとはいきませんが、その後を見据えた関わりを模索しながら日々過ごしています。

社会的養護では、この18歳以降の独り立ちのことを「自立」と呼びますが、私にはどうしても「自立」という言葉があまりなじみません。本人の周りで関わっている人たちは、「ここを出たら自分でやっていかななくてはならないのだからね」と子供たちに言い聞かせます。それはきっと心配する気持ちから出てくる言葉なのでしょう。

ただ、「自立」という言葉が、子供たちに1人で何でもやっていかななくてはならないと思わせて、困ったことがあっても自分1人で対処しようとして、誰かに相談したり、頼ることをためらわせてしまうことがあります。「自立」とは1人で抱え込むことではなくて、誰かを頼る力も含まれるんだということをセットにして伝えていってほしいと思いますし、私もそのように伝えています。

卒業後の住まいや生活についても考えなくてはなりません。住まいの場所は大学の場所にも左右されますが、最終的な進学先が決まるのが3月になる可能性もあり、住まいを決めるにも慌ただしくなりそうです。

卒業後、我が家を出ても何か困ったことがあったら相談してほしいと伝えています。里親には措置解除後のアフターケアが義務づけられていませんが、短くない期間一緒に暮らして、一緒にご飯を食べて、一緒に笑いあって過ごしてきました。いろんな話もしたし、うちの子供たちもとても懐いていて、家族として過ごした確かな時間があると思っています。うちを出たら「さよなら」ではなくて、何かあれば、何もなくてもいつでも訪ねて来てほしいと思っています。

私たち夫婦は共働きで、家事も子育ても分担で、協力してやりくりしています。決して経済的に余裕がある家庭でもなければ、ずっと親が家にいて、何かしてあげられる環境でもありません。それでもこれが現代の家族の一つの姿でもあるし、忙しい毎日の中で、何

を大切にしてお過ごしのかを見てもらえたらという思いもあります。

養育家庭も家庭です。特別なことはありません。逆に言えば、密室で不適切なことが行われていても、外からは分かりにくいです。私たちも完璧な親ではないので、いらいらしたり、当たったり、しんどくなる時もあります。それでも暴力を連鎖させることはあってはならないし、たとえそれが実の家庭では当たり前だったとしても、そうではないやり方がある、安心して信じられる人がいるということは、自分を勇気づけ、元気にしてくれるものだと、本人には感じてほしいと思っています。

そのため、家族だけで抱えないということも大切にしています。もしも本人が我が家で嫌な思いをしたときには、きちんと外に助けを求められる体制が必要だと思います。本人が頼れる、信頼できる人は、たくさんいたほうがいいと思い、里親支援機関の方たちにお願いできることはしています。

最後に、最も大切にしているのが、「本人の気持ちを真ん中に」ということです。人格も習慣も環境も違って生きてきた人たちが、里親委託という形で一つ屋根の下で共に生活することになります。特に高校生ともなると、交友関係も自分の好き嫌いも生活習慣も固まった状態でやってくるかもしれません。そこに我が家のルールとか価値観というものを、一方的に押しつけることはちょっとできないなと思います。ここに来るまでが、たとえ適切な環境ではなかったとしても、彼らが生きてきた人生もまた尊重したいと思います。

ルールや決めごとが、なぜ必要なのかは、対話を通じて理解をしてもらい、決めていきたい。それは、正直、手間も時間もかかることで、夜中まで語り合うこともしばしばあります。本人も納得しないということもあります。寝不足にもなりますが、正直な気持ちを語れる安心感を培うには、時間や手間は必要だと思っています。このやり取りの積み重ねが、いつか我が家を巣立った後にも、人を信じる頼る力につながっていけばと願っています。

5 毎日が新たな始まりの日々

発表者：里父・里母（50代）／里親歴：3年

家族構成：里親、委託児童（7歳女の子Sちゃん）、実子2名

【里父】

我が家が里親を始めたきっかけは、妻の「子供が大きくなったので、夫婦そろって、社会に貢献できる里親をやりたい」といった話からです。最初はとても驚きましたが、妻に説得され、娘二人も賛成しているとのことで、一步を踏み出す決意をしました。

里親になるための講習会では、初めて知ることばかりでしたが、専門家の方の分かりやすい講義で、とても勉強になりました。施設実習では現場を経験する事ができ、自分の子供と同じように育てていけばよいと感じました。また、子供たちと食べる食事はおいしく、交流も楽しかったです。その後、家庭訪問や書類の提出を経て、1年弱で里親認定となりました。そうして、我が家にやってきたのが、当時5歳のSちゃんです。初めて彼女を見たとき、長女の小さい頃に似ているなと思いました。実際に一緒に生活していると、ふとしたしぐさや行動が全く同じで、懐かしく、思い出に浸りながら養育をしています。

Sちゃんが来てから良かった事は、家族がにぎやかになったことです。かつて家族で出かけた場所にもう一度一緒に出掛けたりしています。

Sちゃんはとてもしっかりしていて、最初は言い合いになることがありましたが、一緒にいる時間が長くなるにつれ、お互いの距離の取り方や注意の仕方などの感覚がつかめるようになりました。いまだ、どうしてこういう行動をとるのか、発言をするのか、分からない事もあります。私から声をかけるというよりは、彼女から私に声がかかったときに、「あっち向いてホイ」や「手押し車」で遊んだり、高い位置にあるものを取ってあげたりしています。

初めは、自分の子供ではないという気持ちが出ていましたが、かわいい寝顔や発言・行動に触れていくうちに、少しずつ家族という形になっていると感じます。この1年で、人の話に途中で飛び込むことも少なくなり、自分で考えて行動したり、注意されて怒ることが少なくなり、日々成長を感じます。これからも彼女を見守りながら、彼女が素敵な女性に成長する事を楽しみに、妻と力を合わせて頑張っていきます。

【里母】

私が里親をやりたいと思った理由は、子育てがひと段落したところで、人の役に立つことを模索していた時に思い浮かんだからです。たまたま区の広報に体験発表会があることを知り、まずは話を聞きに行くことを決めました。里親さんの話はとても参考になり、私もやってみたいなと思いました。里親になるには家族の承諾も必要で、娘二人と夫に話をしました。娘二人は即答で「いいね」。夫は少し考えた後「いいよ」という返事でした。

講習会では、里親としての必要な知識やスキルを学ぶ事ができ、施設実習では現場を経験して子供たちと楽しく交流ができました。多くの書類作成と家庭訪問がありましたが、いつも分からないこと等を丁寧に教えていただき、助かりました。

里親をする中で、家族の協力がとても助けとなっています。次女は、私に対応に困っているときは何も言わずに抱きしめてくれ、私とSちゃんが宿題でもめている時も、進まないプリントを終わらせてくれたりします。大学3年生の長女は生活時間帯が違い、一緒にいる時間が一番少ないのですが、「抱っこさせて」と、帰ってくるたびにハグをしてくれ、Sちゃんも満面の笑みで答えてくれます。夫も自分にできる家事を頑張ってくれています。

Sちゃんは一時期もの凄い反抗期となり、何を言っても泣きわめき暴言を吐くときがありました。私自身が精神的に煮詰まり、「もう辞めたい」の一步手前までできましたが、夫がじっくり話を聞いてくれて、「無理するな」と言ってくれました。冷静になってSちゃんの発言を聞いていると、「大好き」と言って抱きしめてほしいのではと感じました。それからは、「嫌い」と言われても、「あら残念、私はSちゃん大好き」と対応できるようになりました。同じ土俵に乗るのではなく、大きな心で包み込めるように、自分を成長させていかなければならないなと感じる出来事でした。

家族の協力があり、里親のサポート体制がしっかりしているので、何とか頑張ってきました。周りにいる方々も、Sちゃんを可愛がってくれて、地域と我が家と、児童相談所の方々と共にチームを組んで、里親をしていると感じています。「里親を始めました」というと、犬と勘違いをされたり、小児科や歯医者でも「初めてです」と言われ、里親の制度を知らない方がたくさんいるのだなと思っています。しかし、「興味があるので話を聞かせてください」という何人もの方にも出会いました。こうして里親をしている人が話をしていく事が大切だと実感します。子供の成長する姿を見るのは、本当に嬉しいものです。昨日できなかった事が今日できたりと、毎日が新たな始まりの日々です。これからも、親・子供ともに成長しながら進んでいきたいと思っています。

6 預かる期間は様々でも家族みんなで力を合わせて

発表者：里親（40代男性）／里親歴：3年（一時保護委託15人含む）

家族構成：里親、委託児童（2歳の男の子）、実子4名

私は飲食店を経営しているので、深夜まで勤務し、休日も不定期であるため、育児に参加できていません。なので、うちの妻を傍観している旦那の話をさせていただきます。

まず里親になったきっかけですが、妻の知り合いで養育家庭をしている方がいて、4人の実子達が里子二人の面倒を見ています。その家庭と出会ったこと、その家族がとても美しく見えたことが、里親に興味を持ったきっかけです。また、養育家庭の実子として育った友人が身近にいる事もあり、里親になることに抵抗感はありませんでした。

私達は、妻と私、中2の長女、中1の長男、小3の次男で、保育園年長の次女の6人家族です。養育家庭になって、3年半というところで、経験もまだそんなにありません。養育家庭は長期的に児童を預かり、養育するイメージでしたが、研修を受けて初めて短期間でも預かる場合があるということを知りました。いずれも未経験でありましたが、短期間の養育にも抵抗感はなかった為、長期と共に希望しました。

養育家庭に認定されてから、しばらくは受託が決まらず、いつ受けられるんだろうとどきどきしながら待っていました。最初に連絡がきたのは5、6歳の女の子で1週間ほどの一時保護委託でした。初見で「パパー」と言われて抱き着いてきてくれた時は、驚き、戸惑った記憶があります。短期間の一時保護委託は、突然に受入先が必要になることが多い様です。タイミング等によっては、私に関わる時間が少ない場合も多くあります。

受入れ依頼は、夕方ぐらいに児童相談所から妻に電話があります。年齢、性別、受託期間、委託理由などの説明が簡単にあり、今日からお願いしたいという場合が多いです。

妻「今日から、中3の女の子、どう？」

私「うん、オーケー。」「今日からどこで寝たら良い。」

妻「あんた下で寝てくれる。」

私「オーケー。」という感じで受け入れることが決まります。

長女が塾から帰ってきて、「アレ、玄関の誰の靴？家族増えた？」

次男「増えた。アニキ。」

そんな感じで子供たちも慣れてきています。

これまでに15人ほど一時保護の子供たちをお預かりしてきました。その多くは中高生

で「突然、中高生をお預かりする事に対して、怖くないですか。」と聞かれることがありますが、今までに怖い思いをしたことはありません。親御さんに厳しく育ててもらった子供が多い印象で、礼儀正しい子が多く、我が家の実子の面倒をよく見てくれます。自由過ぎる実子たちが親から叱られないか、心配してくれたり、直接叱ってくれたりしました。

一時保護では、甘えたい子、話を聞いてほしい子、放っておいてほしい子、学校に行けず勉強もできなかったのも、勉強を教えて欲しいと訴える意欲的な子、色々なお子さんをお預かりしました。我が家に来たときは、自身が話したい時に聞いてあげる。放っておいて欲しいときは、放っておく。あまり関わらないで、求めてきたときだけ可能なことを返してあげる。そういう付き合い方がうまくいっているように思います。また、お互いにリラックスして付き合うために、お風呂の時間、テレビの時間、食事の時間など、ある程度ルールを作る事が必要であることも勉強しました。

お子さんを受け入れると、多少リズムが崩れます。例えば、寝る場所が変わったり、お風呂上がりに裸で出てきちゃ駄目だったり、食事がちょっと豪華になったり、子供を叱りづらくなったり、夜更かしが増えたり、お弁当を作ったり、学校への送迎が必要だったりします。預かる期間が長期化すると、ストレスになることもありますが、長くても2、3か月と思えばそれほど大きなストレスにはなっていません。お子さんの中には自分の部屋に籠りっきりで、あまり関わらずにお別れする子もいますし、お別れが辛くなる子もいます。

一時保護中は東京から出ては行けないルールがあるため、夏休みに都外の実家へ帰省する予定があったときに委託を停止してもらった子がいました。枕元に残してくれた感謝の手紙を読んだとき、もっと長く置いておいてあげればよかったと、妻が泣いているようなこともありました。

我が家の場合は、実子達のお陰で気楽に一時保護の子供を受託できています。長女は、「もう私お年頃なのに」と文句をこぼす事もありますが、気がつけばトランプに誘ってあげたりして仲良くなっています。実子たちも自分のペースで上手く付き合っているようです。

養育家庭になって、実子がいなきゃ無理だったかもと、妻とよく話します。実子、両親、きょうだい、親戚、児相の職員さん、保育園の先生方には感謝しかありません。

本当に社会的養護という言葉通り、周囲に頼って生きていこう。と考えています。

次に長期委託についてお話しします。

一時保護の受託に何となく慣れてきたと考えていた頃、0歳男児の長期委託のお話をいただきました。

面会してみるとお人形さんみたいなかわいい子で、すぐに受託を希望しました。コロナ禍での面会交流は施設に頻繁に通うことができず、会うたびに忘れられている様だったので交流期間の短縮をお願いして2月から交流を始め、4月1日には受託となりました。

受託当初は妻が視界から外れるだけで大泣きし、泣きすぎてよく嘔吐しました。妻以外に抱っこされるのも嫌で、実子の育児は放棄状態になりました。僕もその頃、仕事が忙しく深夜に帰宅するという状況でした。長女は中学に入学したばかりで、突然涙が止まらなくなったりパニック状態になったり、長男は学校でのことなど自分の話をしなくなり、次男はゲームばかり。次女は保育園に行きたくない毎日泣いていたりしていました。

実子にしてみると、里子が来たことで「何で俺たちがこんな目に合わなきゃいけないんだ」と里子を恨んでしまうかもしれないと思い、作戦を変更。5月からは里子と距離を置いて、かんしゃく泣きを放置することにしました。そうしていると実子たちが、里子の面倒を見てくれたりするようになり始めこれで良くなっていくか……。と思っていたところ6月に里子の保育園決定。保育園に行くとストレスで泣きまくり、直後保育園で流行していたRSウイルスに感染し保育園に行けなくなってしまいました。7月も体調不良、病院ばかり。妻はノイローゼ状態になり、里子が泣くたびに私の愛情が足りないということを責められているようだといい、その頃が一番大変な時期でした。

8月になると実子が夏休みで家にいてくれ、里子の面倒を見てくれました。長女、長男はご飯を作ってくれ、おしっこならばおむつも替えてくれました。

9月には、里子の病気がよくなり、保育園に行けるようになりました。その後は大きな病気もなく、体も強くなり元気です。毎朝、5時、6時に起きて全員叩き起こし、迷惑なくらい元気です。「ごめんなさい」とか絶対言わないし、いたずら大好きで、わがままに育ってきました。わがままになって、ようやく家族になれたような気がして、夫婦で喜んでいきます。

妻は受託当初、実子と同じような母性が湧かないかも知れないと自分を責めましたが、実子に対する母性もお腹の中で生まれたように、里子に対しても時間が必要なのだと思います。去年のクリスマスに実親さんからお手紙をいただきました。『現状では自分で育てられない環境を受け入れ、子供の事を考え、養育家庭に子供を預ける決意をした。子供のことをお願いします。』といった内容のお手紙に感動しました。

私たちは里子に対してそうであるように、実子に対しても子離れを意識しながら、子育てをしています。そして、それは子育てにとって良い事だと感じています。

まとめますと、一時保護委託はお互いにストレスにならないように、構いすぎない。ある程度のルールを整備する。お互いにストレス少なく付き合うことが大切。長期委託は家族が増える超ビッグイベントです。でも、実子の誕生の様に社会に受け入れられるわけではありません。職場の理解を得ることも難しく、育休などを取得することも難しいと思われます。今回このような場でお話しさせていただきましたので、里子の長期受託にも育休取得推奨などの法的バックアップをいただけるようにアピールさせていただきます。私たちの場合は、親戚、きょうだい、親が里子を孫として、家族として受け入れてくれたこと、保育園の職員さんのご協力のおかげで何とかやってきました。

「罪悪感を持たず保育園に預けましょう。」「里親手当は胸を張っていただきましょう。」と先輩里親に激励していただき、妻は踏ん張れたと言っていました。一人で自分を責めずに、できるだけ周りを巻き込んでいけたらいいと思います。愛情は時間とともに多分に湧いてくるので焦らずに。いつまで経ってもかわいくないと笑うパワフルな先輩里親の存在にも助けられました。一番感謝しているのは実子に対してです。里子達をすぐに、受け入れてしまう、実子を尊敬しています。

里親になることを検討されている方がおられましたら、ぜひ、ご相談に行ってみてください。登録のために必要な里親研修では、小児医、児童相談所の児童福祉司、発達臨床心理士といった専門の方からの話など、いろいろな子育てに役立つお話が聞けてすごく勉強になりました。ここまで、自分の体験のように多くを話しましたが、ほとんどは妻の体験をもとに話しています。妻が言うには、里親をする秘訣は、夫に期待しないこと、だそうです。

7 里子を受け入れて自分も成長することができた

発表者：実子（20代男性）

家族構成：里親、実子（自立・発表者）、

委託児童（高校1年生のM君、小学4年のY君、高校2年のR君）

実子としての立場から話をさせていただきます。

今、大学3年生で、一人暮らしをしています。週末は実家のほうに帰ってきて里子ちゃんとはよく話し合う機会があるので、最近の里子ちゃんとの出来事や過去の思い出を話していきたいと思います。

今、うちで預かっている里子ちゃんは三人います。一人目が、最初に預かった高校1年生のM君と、二人目が、小学校4年生のY君。半年前ぐらいに預かったばかり高校2年生のR君、この三人が今預かせてもらっている里子ちゃんたちです。

まず、預かることになったきっかけですが、自分のうっすらとした記憶の中では、自分が「弟が欲しい」と言ったことが、たしかきっかけだったのではないかなど記憶しています。そう言ったら、両親も「じゃあ、ちょっとやってみる」なんて軽い感じで始めてみたようです。最初に自分が小学校1、2年生くらいの頃に乳児院に見学に行って、自分たちのことを何かこうぼうっと見つめている子が一人いて、その子が最初にお話ししたM君でした。最初のM君の印象としては、何を考えているか分からない、表情があまり見えてこない子というものでした。兄弟が増えて最初はすごくわくわくしていたのですが、M君があまり話しても笑顔がないので、思っていたのと違うなと思いました。最初は、けんかばかりでしたが、だんだん一緒に過ごしていくうちに、絆も深まっていきました。

次に、小学校4年生のY君は、自分が中学校2、3年の頃に預かった子で、この子はM君とは違って、「すごくいい子すぎるな」と思ったのが第一印象でした。周りのことをすごく見ている子で、「こう言ったら喜ぶんじゃないか」というのを自然とできている子で、でも、人一倍気を遣っていた部分もあったと思います。そのY君との関わりもちょっと、いろいろ問題もあったりしましたが。

次は、最近預かったばかりのR君ですが、この子は今、順調に進んでいない状況で、これから一緒に家族全体でR君との関係もよくしていきたいと思っている、我が家の目下一番の課題です。これが三人の最初の印象です。

この三人の里子ちゃんを預かって、いろいろな思い出があるのですが、一番思い出があ

るのはやはり一番最初に預かったM君です。自分としてはけんかばかりしていて、正直、自分のこと嫌いなのかなと思っていたのですが、慕ってくれていると思う思い出が幾つかあります。

一つ目は「M君の脱走事件」です。M君が小学校のときに自分が中学生で、当然校舎は小学校、中学校は離れていて、一緒に学校に行くなんてことはありませんでした。その頃M君は反抗期で、学校の授業を途中で抜け出したことがありました。「一体何があったんだろう？」とM君を問い詰めたら、「違う校舎にいる自分に会いに来た」と答えたのです。脱走事件の原因が自分にあったということに驚きました。わざわざ学校から抜け出してきて自分に会いに来たことは、何か問題といえば問題なのですが、とてもうれしかった思い出です。素直に喜べないですが。

二つ目は、こういうことがありました。自分が自転車をパンクしてしまい、その自転車を放置していたら、数日してそのパンクしたタイヤが直っていたことがありました。M君に「これ何があったんだ？」と聞いたら、ひょうひょうとした顔で、「それ、直しに行ってきたよ」って言うので、「あ、ありがとう」なんて会話をしたのです。そのときのことを母親に聞いてみたら、「ひょうひょうとした顔で本人は言うけど、その自転車はパンクしていて、しかも鍵が見つからなくて、鍵のかかった状態で自転車の修理屋さんまで押して持って行って、何かもう途中ですごく泣きながら帰ってきたらしい」とのことでした。M君は、自分にはそんな感じを見せずに、ひょうひょうとした感じで「直してきたよ」なんて言うので、自分も「あ、ありがとう」みたいな感じで終わったのですが、後からそれを母親から聞いて、驚いたことを記憶しています。

三つめは、M君に自分のゲーム機を貸していて、それは古くなって自分がもう使わなくなったゲーム機ですが、M君が自分の使っていたゲーム機のデータを消してしまったことがありました。自分としてはもうやらないゲームでしたが、一応自分で大切に使っていたゲームのデータだったし、消された側としてショックだったので、軽くM君を叱ったことがありました。そのときにM君は怒られる意味が分からないという態度で、それで自分もヒートアップしてしまって、結構大きなけんかになってしまいました。その後少ししたら、M君が自分のゲーム機を差し出してきて、「ちょっとお兄ちゃん怒っている？データを消されて怒る意味が分からないから、その気持ちを理解するために自分のデータを消してほしい」と言って、わざわざ自分のゲーム機を持ってきたことがありました。そういう自分の分からない感情というか、何で怒っているのだろうという相手を理解しようという気持

ちがあったのだなと思います。その気持ちにとっても感動したとことを覚えています、そのときは動揺してしまい、あまりうまく返せなかったです。M君とは、他にも、これだけではない、とてもいい思い出があります。

次にY君です。Y君は、最初は「すごくいい子すぎる」と話したと思いますが、だんだん家庭になじんでくると、すごく甘えるようになって、自分たちにだらしのないところを見せてくれるようになりました。最近はずごく打ち解けてきて、前までは一人称が、“僕”とかわいい感じでしたが、最近家族の前でも「俺さあ」と、少し調子乗っている感じになってきました。そういった面を見ると、かわいくて、成長も感じられるようになり、やはり安心して信頼してくれているのだなということを感じています。里子ちゃんと過ごす中で、本当に一緒に触れ合ってきて、よかったなと実感しています。

R君は、自分が一人暮らしをしているので、触れ合う、話し合う機会があまりなく、自分からはR君とのことは言えないのですが、最近本当に家にこもりがちになっているので、努めて自分からも積極的に話しかけて行って、これからR君ともいい思い出が作れたらいいなと思っています。

これまで里子ちゃんたちとの思い出を軽く説明しましたが、里子ちゃんを預かってからの両親の変化も、実子の立場として見てきました。最初、小さな頃の自分は、何か大人はある種完璧な存在というか、何でもできるんだと思っていました。子供たちを預かっている中で、いろいろ衝突して悩んでいる姿を見て、大人もこうして新しい環境、新しい子供たちを受け入れて悩むのか、こうやって衝突するのかということを経験して新鮮に思った記憶があります。

母親も最初は自分と違う子供を預かって、どう接していいか分からなかった部分もあったと思いますが、一人、二人、三人と増えていくうちに、それが楽しくなっていたようで、最近、最初子供を預かる前よりも何かバイタリティーがあるというか、もうすごく生き生きとしているような気がします。歳は取っていつているのですが、反比例して生き生きとしていつていると思います。

父親は元々頑固な性格なので、子供たちの悪い部分やあまり許容できない部分もあった時に、少し大人げない部分も見せてしまい、本人も本人なりにすごく悩んでいたようです。自分でどうにか解決しようとして、たくさん本を読み込んでいました。父親が里子ちゃんたちと何か問題があったりすると、そのたびに父親の部屋の本棚の中の本がどんどん増えていくので、今、悩んでいることがうかがえました。

そうしたことを踏まえて、本当に両親はすごく変わったなど、本当に一言で表せないですけど、変わったなと思っています。やはり里子ちゃんたちを受け入れて里親も成長させてもらえたというのが大きいと思います。

今の里親制度について思っていることですが、自分の意見としては、お金を頂いて育てることなので、お金の面では不自由はないかとは思いますが、里子ちゃんを迎え入れて精神的な負担もありますし、やはりそういったことがあって、家庭内でのひずみが生まれてしまうこともあるので、気軽に始めるものではないのかなと自分の中では思っています。

里親は、ある程度預かる子供の条件を選べたりすると思うのですが、逆に里子ちゃんの立場とすると、自分が誰に預けられるのか分からなかったり、何なら里親のところに行きたくない、保護所にいたいのに行かなくてはいけないという、そういった実態も多分にあると思います。今の現状、この制度については、里子ちゃんにも選択肢がもう少し与えられたらいいのかなと思っています。自分が里親制度について少しネガティブな要素を挙げたのですが、先ほども言ったように、自分も里子ちゃんたちが入ってきて精神的にも成長させられて、我慢するという部分ではすごく成長させられました。また、それだけではなく、和気あいあいとした楽しい家庭になる、とてもいい部分も持ち合わせていると思います。

8 養育の結果は長い目で見ないと分からない

発表者：里親（70代男性）／里親歴：17年

家族構成：里親、元委託児童（大学生）

指折り数えてみますと里子が我が家に来てもう15年になります。たしか4、5歳のときに来たのですが、今となってみるともっと以前からいるような気がします。

我が家の台所にバスの中で撮った彼女の写真があるのですが、我が家に来たばかりの頃の幼稚園の遠足の1コマで、笑っているのですがどこかちょっと無理をしていて、寂しそうでおどおどした様子でした。我が家に来たときもそんな感じで、私にはその頃の姿が一番いじらしくてかわいらしく思えたのですが、無理をして笑っていたところもありました。

さて今日は、なぜ里親になったか、どうやって里親家庭を運営していったか、その結果ハッピーになったかと、この3つについてお話をしたいと思います。

最初になぜ里親になったかということですが、これが最大のテーマであろうと思います。これはいろんな人から一番多く受けた質問でもあります。我々は様々な思いが重なってそういう結論に達しているわけで、どれか一つを理由にあげるといのはなかなか難しいです。ただ一つ言えることは、家内が流産をしてしまい、妊娠8か月で亡くなった胎児で、かわいい女の子だったのですが、二人とももう、妊娠とか出産とか育児というのは不向きだと、そういう年齢だなということで里子を預かって育ててみようというふうに思ったわけです。

当時、家内は家内で気落ちしていましたので、私が児童相談所に申し込むという手続きをしました。しばらくして子供がつくばの施設にいるから会いに行ってもらっちゃいという話があって、ようやく心を躍らせて行ったのですが、私たちは多摩に住んでいて、車で一日がかりの旅行でした。当時、今でもよく覚えています。守谷のサービスエリアで休憩をして、つくばの施設に行って、その女の子と会って話をしたり散歩したりして、帰りは同じ守谷で晩ご飯を食べて帰るという日々でした。最初は週1回だったのですが、そのうちに週に何回となって、当時夏の暑い盛りで過酷な訪問となり、私も家内もばててしまい、その頃に児童相談所から子供のお泊まり訪問があるということで、私たちは正直ほっとしました。お泊り訪問は、週末に子供が我が家に来て、週明けに家内が電車で施設まで送るというスケジュールでした。何度かそれを繰り返しているうちにお泊まりの日が段々長くなり、最後に女の子が「おじちゃんとおばちゃんのところなら行ってあげてもいいよ」と

いうことで、彼女は2007年の11月付で正式に我が家に来ることになりました。

次にどうやって里親の家庭を運営していったかということですが、里子を家庭に迎えるにあたり、あるいは思春期になると、いろいろ波乱万丈だったわけです。受け入れるときはそれぞれの事情といたしますか、小さいお子さんだったり小学校や中学・高校だったりいろいろなあるかと思いますが、いずれにしてもそのときに受け入れる側に具体的に何が必要かということとはなかなか思いつかないものです。実は娘が来てすぐ、幼稚園で遠足に行くことになったのですが、何しろ私たちは、遠足なるものをとうの昔に忘れていて、何を買って何を揃えたらいいのかよくわからなくて、その前の日の夜に国立の駅前を走り回って弁当箱や水筒を探しました。それを今でも懐かしく覚えています。

娘は最初我が家に来たとき、自分が置かれた生活が長続きするというふうにはどうも思っただけでなかったようです。最初は、この生活もまたしばらくしたら変わるのだろうという気持ちです。それがやっと腰を落ち着けて長く生活するようになって、自分は安定した環境に置かれていることが分かったのは5年ぐらい経ってからだったような気がします。

小学校時代は永遠に続くのではないかと思うような、途方もなく長い時期でしたが、この時代を通じて思いがけない経験をしました。それは地域の方々との密接なお付き合いです。娘は、近所の公立小学校に入れたのですが、例えば近所には同じ小学校のご父兄もいてお付き合いができたたり、向こう3軒のおじさんおばさんに挨拶をしたり、運動会にご招待をしたりしました。学芸会の報告をしたり、遠足のお土産を配ったり、何かとお付き合いができたと思います。これは本当によかったと思っています。サラリーマンというのはご近所とお付き合いが希薄なので、そういう昔ながらの隣近所のお付き合いというか、ふれあいというもの是非常に得難いものでした。子供の養育も本来はそういうふうに地域で支えるというのがあるべき姿だと思います。

娘はいつも小学校から走って帰ってきて、家内はそれを息を潜めて戦々恐々として待っているわけです。泣いて帰ったり怒りながら走りこんできたり、笑って飛び跳ねながら駆けてきたりと、誠に刺激にとんだ日々でした。家内は晩ご飯の支度をしながらいろいろな話を娘から聞かされます。先生に褒められたとか、あまりこれはありませんが友達とけんかをして先生が公平に裁いてくれなかったか、それがどんなに悔しかったか、どんなに怒っているか。そういうのを涙ながらに話し、その話は晩ご飯のときに私に伝えられ、こうして私もおいしくない晩ご飯を何度か経験し、一家そろって悲喜こもごもの6年間だったわけです。

思春期は中学に入って始まったように思います。一番反抗期だったわけですが、これまでの生い立ちには事情があって、望んでもいない境遇となったということで、いろいろなストレスがあり、そういう割り切れない気持ちを我々にぶつけているのだろうというふうに思っていました。

心理学的にはこれは「試し行動」というふうに言うそうですが、言わばその親子関係、それが疑似的なものであるにせよ何にせよ、それを揺さぶってみて、強固なものかどうか確かめたいという気持ちがあったのではないかと思います。ただこれは、実の親子であっても似たり寄つたりのことがあるわけです。そういうことを真正面から受け止めるのは家内です、やはり父親というのはあれこれ社会生活を営んでいる関係上、外に出ることが多くて、会社から帰ったときには家内からその話を聞くわけです。私たちは考えてみれば、子供のそういう初々しい時期の心情というものをとうに忘れてしているわけです。家内は何度かこれじゃあもう無理だというようなことを言ったことはあります。私もそれは特に有効な解決策もなく、ああそうだねというわけです。うまい手も特にないわけですし。もう一日だけ頑張ってみようよと、そういうときにはそういうふうに言います。ところが、次の日になると何かしら心が和むことがあるものですから、反省もしたりしながら、割り切ってきました。

時々朝起きると家内がいないことがありました。娘にどこに行ったのだと聞くと、「かかは家出したみたいだ」と言い、私は家内が家出するのはおかしいと思うわけですが、家内もいろんなことで我慢ができなくなると、近所を回って頭を冷やしていたようでして、近所の直売所でよく野菜を買ってきていました。一人で家内が墓場に行ったこともあるようで、無理解な夫と反抗期の娘に耐えられず、墓の草むしりなどをしながらご先祖様に愚痴っていたのだろうと思います。

このようなこともあり、大変波乱万丈の思春期だったわけですが、中学・高校時代をつつがなく過ごして振り返ってみて、私が一つだけ思うのは、一度も娘を返そうと思ったことはなかったということです。何でそう思わなかったのかなというのは今となっても不思議なのですが、そういうふうに思ったことがなかったのです。実は今、子離れの時期に差しかかっています。今、娘はもう大学3年生で、これからどうやって巣立っていくのか、それを我々がどうやって見守ったらいいいのかというのは、実はまだ経験していませんので、切り開いていかなければいけないのだと思います。これが実に一番難しいところです。もう一つは、我が家も娘一人だったのですが、完璧に一人っ子状態で、甘える環境になって

いるので、これはあまりよくなかったなと思っています。できれば里子さんが複数人いれば、切磋琢磨するような家庭環境になってよかったのではないかと思います。

今後は、大学院に行くとか資格を取りたいとかそういうお子さんも出てくるのではないかと思います。そうしたことへの支援は望まれるところです。社会が、もちろん里親家庭もそうですが、子供に対して注ぐまなざしがないと本当に疎外感を持ってしまうので、そういうものがいいと思います。

最後に、その結果ハッピーになったかというお話をしたいと思っています。これは正直わからないのですが、娘にとって、もっといいご家庭があったのかもしれない、そう思っています。ただ、私たち、親にしても娘にしても、選択肢というのはたった一つだけで、私もつくばの施設に最初伺ったときには、たくさんの子供がいることに驚倒したわけです。何とか全員を連れて帰りたいという衝動に駆られました。その中から一人だけうちの娘が来たわけです。考えてみるとこれは不思議な縁ではないかというふうに思うわけです。

一つ言えることは、養育というのは長いスパンで見なければいけなくて、皆さんの目の前にカードが配られ、そのカードは裏返しのままなのです。10年たって初めて表に返して、その結果を見ることができるというものです。その間はひたすら努力を続けていかななくてはいけないわけですが、性急に結論を出してはいけないというふうには思います。例えば、今日こういうことがあったから明日は、もうこうしようとかいうのはやめた方がいい。子供の成長はやはり植物の発芽と同じで長い時間かかるのと、こっちを向けと言ってもあっちを向くし、真っ直ぐと言っても曲がった枝ぶりになるわけです。娘もいいかげん曲がった枝ぶりだというふうに思いますが、それはそれで見応えのある、味わいのある枝ぶりになったのだろうと今はそう思います。日々、カードがなかなか表に返らないこの長い期間に望まれる特性は何かというと、それはある種の鈍感さだと思っています。

ここからは結論めいたこととなりますが、家内とこの間、話をしてみたのですが、私たちは15年間、彼女を育ててきたというふうに思い込んでいたのですが、よく考えてみると、実は私たちが里子に育てられていたのだと思い至りました。家族というものはこうして育てたり育てられたりしていくものではないかと思うわけです。

体験発表会に来られた方々はもともとそういう志を持っておられるわけで、こういう説明は必要ないのかもしれないのですが、皆さんの今後の崇高な使命が、預かっているあるいは預かろうとしているお子さんにとって希望の星になるのは間違いないと思いますので、どうか皆さんお子さんと新しい歴史をつくっていただきたいと思います。

9 どうしてもあなたと暮らしたくて、暮らせて幸せだよと言いたい

発表者：里親（40代女性）／里親歴：4年

家族構成：里親、委託児童（3歳の女の子Aちゃん）

私たちが里親になったきっかけは、実子に恵まれなかったことでした。長い間不妊治療をしていましたが結果が出ず、二人ともへとへとになり「もうやめてもいいんじゃないか。二人と飼い猫一匹でひっそり暮らしていこうよ」という話をしていました。

その頃にふと、私の古い友達が昔、「私は養子でもいいなって。海外だと養子もごく当たり前に育てているし」と話していたことを思い出しました。早速インターネットで調べていたとき、この体験発表会に行き着き、参加してみると里親さんの体験談がとても面白くてすっかり夢中になりました。都内あちこちの会場で何人もの話を聞いているうちに「私たちがやりたかったのはこれだ」と運命のような気持ちになっていました。

すぐに児童相談所へ連絡し、里親研修まではぼんぼんと進んだのですが、その研修で私たちは初めて壁に当たりました。それは、一緒に研修に参加していた人たちが、『実子はいるけれども、それでも子供たちのために何かをしたい』というような、とても強い志を持った方やスキルを持っている方が多いことに、ふと気がついたのです。

一方で自分たちは、とにかく子育てしてみたいという「私が私が」のエゴだけで研修までできてしまったので、こんなことで大丈夫なのか、こんな大変な仕事できるのだろうか、研修の帰りによく夫と話をしました。それでも、やっぱりやってみたい、という気持ちが勝り、受託までは引き返せるのだからというのを合い言葉に里親登録をしました。

登録から1年以上が経って、Aちゃんの紹介がありました。初めて見た1歳のAちゃんの写真は本当にかわいくて、早く会いたいと気持ちだけはアクセル全開になりましたが、ちょうどそれが2020年の2月のことで、直後にコロナウィルス感染症の影響による行動制限が本格的に始まってしまいました。施設へ通っての交流はお預けとなり、初めての面会は20分間のオンライン交流というものでした。私たちは、Aちゃんが動いている姿にキャーキャーと大喜びでしたが、Aちゃんは、タブレットの中で知らない人が騒いでいるという風に見えたのか、怪訝な顔をしたままでした。

そんな交流を数回重ね、ついに直接会えた日も、コロナ禍が続いている状況でしたので、Aちゃんがいつも生活している部屋には入ることはできず、乳児院の離れのような部屋での交流となりました。朝、部屋でどきどきしながら待っていると、遠くから号泣する声が

だんだん近づいてきます。泣き続ける彼女を職員から引き取り、必死におもちゃを使ってあやして、やっと慣れてきた頃にはその日の交流は終わりということの繰返しでした。コロナ禍では、交流を頻繁にすることはできず、次に会いに行くと、Aちゃんとの距離はまた振出しに戻っているという感じでした。

私たちは子供が好きなつもりだったのですが、スキルのなさに本当に落ち込み、帰り道で「今日は一瞬笑ったね」「今日は前より一口多く食べた気がする」と、無理やり小さないいことを見つけて気持ちを保っていました。

乳児院の方からは、ご飯もう食べたんですかとか、絵本を読むのがうまいとか、とても褒めていただくのですが、私たちは毎回夕方4時に終わるとくたくたでそれどころではありません。児童相談所の方からは、もし違和感があったらそこでやめてくださいと言われていましたが、正直違和感があるのか、ないのかもさっぱり分かりませんでした。ただ交流を重ねるにつれて、最初は合い言葉にしていた「引き返せる」という選択肢がいつの間にか無くなり、Aちゃんはうちで暮らすんだと自然に思うようになっていました。

何度かの外出や外泊を経て、いよいよ長期の外泊のとき。問題がなければ、そのまま正式に受託をということになりました。我が家での長期外泊の初日、Aちゃんは、とびきりのおしゃれをして、何かを察していたのか、それまでの外泊のときよりもすごく緊張しているようでした。今、その日の写真を見ても、緊張で唇をかみしめていて、「今日からこの子を一番そばで見守るのは私なんだ」と強い気持ちが沸いたことを覚えています。

長期外泊から正式に委託となり、幼稚園に入るまでの1年4か月は、正直楽しいことはあまり覚えていないほど、しんどいことのほうがずっと多くて、育児を楽しむなんていうのは夢のまた夢でした。

私の身のまわりにもいろいろな変化があり、近くに住んでいた友人二人が遠くに引っ越ししてしまったり、オリンピックの影響で夫の仕事が多忙になり完全ワンオペが続いたり、いきなりぎっくり腰にもなりました。また、コロナ禍の中、公園でママ友ができる雰囲気でもなく、里親同士の集まりも開催が難しいといった状況でした。

そんな中、Aちゃんはちょうどいやいや期、試し行動が始まり、電話をいじったり、上にあるものは全部叩き落したり、猫を全力で追いかけまわしたりと、今なら多少慣れてスルーできるようなことにも、私も感情的になってしまうこともありました。自分には子育ては向いていなかったんだと思ったり、ほかの里親さんにもっとすてきな方がいっぱいいるのに、よりによってこんな未熟者のおばさんのところに来てしまって、Aちゃんにとっ

て本当によかったのかと思ったり、八方塞がりのような気持ちでした。

そんなときは、回りの方からいただく言葉一つ一つをかき集めて、どうにか一日一日を乗り越えていました。例えば友達からの「完璧な親なんていないことだけはとにかく覚えておいて」と言う言葉や、Aちゃんが道で大の字になって動かないときに、通りすがりの大先輩の女性たちが声をかけてあやしてくださったりして、それだけで本当にほっとしました。里親支援専門相談員の方が時々訪問してくださるのも、友人たちと会えない中でAちゃんと遊んでくれたり、私の話を聞いてもらったりする、本当に数少ないほっとできる時間でした。

この1年4か月間について、今から思えば私のほうも、もっとちゃんと、これ困っているとか言葉にして、あちこちに頼ればよかったと思います。私から相談すれば頼れる制度があることはちゃんと知っていたので、もっとうまく利用できたのではないかなと思っています。これから里親になられる方には、ぜひ使える支援は全部使っていただきたいです。

Aちゃんは、今年4月に幼稚園に入りました。とにかく楽しいようで、お迎えの後も何時間も帰らずに居残って遊び続けるので、先生にもそろそろ帰ってくださいと言われるほど、毎日元気に過ごしています。ママ友もできて、育児が楽しいなと思えることも増えています。

また、受託するときに気になっていた、周囲にどう説明したらいいのかということについては、お子さんやご家庭の事情にもよるので、正解はないと思いますが、私たちの場合はオープンにしています。ご近所さんには簡単に説明をして、とてもかわいがっていただいています。幼稚園ではクラスの最初の懇談会で、ごく簡単に伝えました。仲よくなったママさんに伝えたときは、「ふーん、そうなんですか」と薄い反応で、ちゃんと伝わっているのかなと思いましたが、後日「本当にびっくりしてネットで調べました」などと事情を理解していただき、周囲の方にも恵まれていると感じています。

Aちゃんにも里親里子であるという話をよくしています。初めは、ふーんと薄い反応でしたが、最近は少しずつ理解をしているようです。今の私にできることは、うざいというくらい「Aちゃん大好きだよ。大切だよ」と伝えることだと思い、毎日ぎゅうぎゅう抱きしめて伝えています。

Aちゃんのほうは、どんどん口が達者になっていて、私が注意をしたときなどは「ママはAちゃんのことを大好きなんですよ。さっきそう言って笑ってたでしょう。」と言い返されます。里親研修では、そういうときは落ち着いた声で、Aちゃんの気持ちに寄り添

って、分かるまで根気強く話すということと言われるのですが、これが私にはなかなか難しいことで、理想とはほど遠い自分によく落ち込んでいます。それでもAちゃんを愛おしいな、可愛いなと思う気持ちは日々最高値を更新していますので、とにかく本人に言葉と態度で伝え続けたいなと思っています。

受託のとき、児童相談所の方には、ゼロ歳スタートの気持ちで、甘々な親でいてくださいねと言われていましたが、最初に我が家に来た頃のAちゃんはとても自立心が強くて、何でも自分でやりたがる子でした。でも最近は朝の登園やお迎えのとき、夜寝るときに甘えてくれることが増えて、やっと彼女が「ゼロ歳スタートをしてもいい」と思ってくれているんじゃないか、思ってくれているといいなと思っています。

“赤ちゃん返り”ではないかと感じることも増えてきて、おっぱいを吸いたがるとか、「Aちゃんは昔赤ちゃんだったよね」「こんなに小さかったよね」と、自分で赤ちゃんのときの話をしてくれることもあります。そういうときには、乳児院から頂いたたくさんの写真を見せて、「そうだね。大きいおうちにいたよね」、「皆にかわいいねって大事にしてもらっていたね」、「ママも初めて会ったときかわいって言っちゃった」というような話をしています。

彼女はまだ小さいので、これからきっと悩んだり、向き合わなければいけないときが来ると思います。それは私自身が経験したことのない壁なので、未熟な私があるときにちゃんと彼女に寄り添えるのかと、不安に思うことはあります。そのときのために準備は必要ですが、今のアクセル全開の勢いも忘れないように、確かに私は里親として未熟でアバウトで雑な親だけれども、エゴから始まった生活だけれども、どうしてもあなたと暮らしたかったし、暮らせて幸せだよと言えるように、これからも一日一日を積み重ねていけたらと思っています。

10 里親制度、里親家庭というものがごく当たり前の環境になってほしい

発表者：里父、里母（50代男性、40代女性）／里親歴：2年

家族構成：里親、委託児童（2歳の男の子A君）

【里父】

私たち夫婦は二人でゆったりと楽しく過ごしていましたが、子供のいる生活も送ってみたいと、だんだん強く思うようになりました。調べるうちに里親という制度があることを知り、たくさん夫婦で話し合った末、私たちは血のつながりはあまり重要ではないと考えて里親に登録することを決断しました。

はじめは「もしも・・・」と想像することが多く、楽しみな反面、仕事と育児の両立や育児にまつわる様々なトラブルへの対応、お互いの家族の説明などの心配事もありました。このとき、先輩方の経験談などが非常に参考になりました。

登録にあたっての研修は、育児が未経験だった私たちにとって非常に学びの多い場となりました。また、児童養護施設での実地研修は、見たり聞いたりするのとは大違いで、私たちにとって貴重な体験となり、そのときの衝撃は忘れられないものとなりました。

【里母】

施設での研修で一緒に過ごした子供たちは小学校中学年でしたが、とにかく近くにくっついてかっついていました。心から求める要求全てに答えてあげたかったのですが、時間が足りなくて残念でした。研修のたびに子供の心は特定の大人とのつながりが成長において非常に大事だということを痛感し、もし乳児と接するだけの研修だったら、こうした子供たちの心を見ることは無かったらと思うます。

【里父】

その後、児童相談所から紹介を受けたA君は、当時1歳2か月でした。研修では小学生と接することが多かったので、年齢を聞いてとても動揺していたと思います。初めて会ったときのA君はまだ歩けませんでしたが、手押し車やコンビカーで遊ぶ元気な男の子という印象でした。最初は、抱っこ仕方分らず、そうっと触れるように抱っこしたのを覚えています。緊張が伝わらないよう、できるだけ笑顔でということをお心掛けしました。

【里母】

週3回の乳児院での交流は、会える時間が限られていたので、いつももっと会いたいなと思っていました。真夏だったので汗だくになりながら通っていましたが、とにかく会え

るのが楽しみで楽しみで仕方なく、交流が進むにつれ「あ、来た」という表情をしてくれたのが嬉しかったです。

【里父】

こうした交流を経て、A君は我が家で一緒に生活することになりました。これまでの生活は一変し、親子共々、新たな環境と生活サイクルに慣れるのに一苦労でした。A君も知らないところに来て、本当によく頑張ってくれたと思っています。育児は協同作業と協同責任ということを非常に痛感しました。今、A君は、私たちにとってかけがえのない存在、家族として生活し、毎日元気に保育園に通っています。朝から晩まで本当によくしゃべり、よく笑う、表情豊かな元気な男の子です。保育園でほかの子供たちと交流することが、本人の成長にもつながっていると感じます。最初の頃は、共働きであることを心配していましたが、在宅勤務や時短勤務など、会社の制度を利用して育児の時間を確保しています。

また、A君との生活では「一緒に楽しむ」ことを大事にしています。食事は3人でお話ししながら楽しく時間をかけます。週末や休日は一緒に公園に行ったり、外食にもチャレンジしたりしています。これから成長とともに、悩んだり反抗したりと、いろいろなことがあると思いますが、常にA君の味方であり、よき理解者であり、一番安心できる存在でありたいと思っています。

そして、可能な限りいろいろな体験をしてほしいと、夏休みやお盆休みには、ポニーに触れたり、海水浴や花火をしたりなど、様々な「初めて」を楽しみました。一緒に体験することは時間を共有することで、家族として大切な時間だと考えています。

さらに、もう一つ大事にしていることは「息抜き」です。仕事と育児の両立は簡単ではなく、やはり体力、気力を消費します。毎日の生活は良いことばかりではなく、日々の小さい苦労がたくさんあり、知らず知らずのうちに疲れていたり、ちょっとしんどくなったりすることもあります。そんなときは、我慢せずに、夫婦だけの時間をつくったり、それぞれ個人の時間を設けたりして、リフレッシュするようにしています。

A君が家族になって1年が経ちましたが、子供のいる生活は非常に素晴らしいというのが実感です。そして、私たち夫婦も、育児を通して、学ぶことや新たな発見があるということを感じました。

私たち夫婦が里親にチャレンジしてみようと思ってから2年が経ちました。夫婦生活は劇的に変わり、子供の存在が私たち夫婦に充実感を与えてくれています。里親制度、里親家庭というものがごく当たり前の環境になってほしいと願っています。

11 自分のできる範囲で手を差し伸べて

発表者：里親（40代女性）／ 里親歴：一時保護（5歳男の子R君）を含め3年程
家族構成：里親、実子2名、委託児童（3歳女の子Sちゃん）

私たち夫婦が養育家庭に興味を持った経緯ですが、我が家には息子2人の下に長女がいました。娘は4歳の時に難病を患い、5歳で空へと旅立っていきました。娘の闘病の1年間、そして娘に会えなくなっただけの時間はまさに絶望の日々でした。そんな中、テレビでは虐待による幼児の死亡のニュース。何もできない自分に心底無力さを感じていました。そんなある日、主人が、「こんなイベントがあるけれど聞きに行ってみない？」と誘ってくれたのが、今回のような里親体験発表会の記事でした。私も以前にテレビの特集で見ていたので、興味を持って2人で聞きに行きました。そこで初めて、養育家庭や里親制度ということ詳しく知り、日本では施設で育つ子どもが多いこと、また世界に比べて里親が非常に少ないという現実を知り、驚きました。私たち夫婦にできることがあるならば、やってみようという気持ちにもなりました。その後、家に帰り、子どもたち2人と話し合ったところ、「自分たちにできる範囲で協力するので、やってみたらどうか」という後押しがあったため、里親の登録へと進みました。

登録後は、1年ほど何もなく、不安と期待を胸に待っている状態でしたが、ちょうど1年が過ぎた頃、「5歳男の子R君」の一時保護のお話をいただきました。私も仕事をしているので、迷ったのですが、お受けすることにしました。R君はとても人懐っこい性格で、おしゃべりがとても大好きな男の子でした。初めて預かるという経験もあり、夫婦ともにちょっと疲れることもあったのですが、約2か月半お預かりしました。

最後の方で、R君の保育園の運動会に参加しました。R君は予想以上に大喜びし、当日も張り切って踊ったり、手を振ったり、とても喜んでいました。3人で手を繋ぎながら帰るときに、「今日は見に来てくれて本当にありがとう」と嬉しそうなきらきらした表情をしていたことを今でも覚えています。小さいながら色々な思いを抱えて頑張っていると思うと本当にいじらしくて、どうか今でも元気に過ごしてほしいと、いつも思っています。

一時保護が終わり1か月経った頃、現在一緒に住んでいるSちゃんの長期委託の話をいただきました。当時1歳半だったSちゃんは私たちが乳児院に面会に行くと、大好きだった保育士さんが部屋を離れてしまうというのが分かっていた、私たちの顔を見るなり、いつも大泣きしていました。面会は段階を追って進めていくので、徐々にSちゃんも慣れて

きて、そのうち一緒に遊んでくれるようになっていきました。ただ、Sちゃんにとって乳児院の生活が全てだったということもあり、2歳で我が家に来てからも非常に怖がりな性格は続いていました。インターホンや電話が鳴るたび怖がって私にしがみついて泣いてしまうので、最初のうちは常に私はSちゃんを脇に抱えて移動するというような状況でした。

しかし、子どもの成長は本当に素晴らしく、段々慣れてくるものです。私は仕事をしているため、週2日は誰かに預けなければならず、初めは隣に住む私の母にお願いしていたのですが、その後、ベビーシッターさんや保育園の一時預かりを利用しました。色々な経験を積むことで、今では保育園に毎日泣かずに楽しく通っています。Sちゃんの世界がどんどん広がり、心も解放されていく様子を見ていると本当に嬉しくなります。また、Sちゃんが来てくれたことで、家族を明るくして会話を増やしてくれています。里親になることを少し心配していた私の母も、「この年でこんなに小さい子の成長が見られて本当に幸せだわ」と言ってくれるようになりました。実子の兄2人は年が離れていますが、接する時間がある時は一緒におもちゃで遊んでくれたり、次男がボールで遊んでいれば、Sちゃんも真似して同じようなことをして、とても微笑ましい光景を嬉しく思います。

子どもは大人が思う以上に繊細で傷つきやすい心を持っていると思います。その大切な幼少時に安心して抱きしめてくれる、たまには喧嘩しても自分の成長を手を叩いて喜んでくれる、そして、必ず自分の帰りを待っていてくれる、そんな場所があることできっとその後の人生を力強く歩いていけるのではないのでしょうか。血の繋がりに関係なく、子育ては本当に体力と根気がいる重労働です。そして何より、自分の思い通りにはいきません。しかし、「あー」「うー」としか話せなかった子どもが会話をできるようになったり、自転車の後ろでかわいい歌声を聞かせてくれたり、たくさんの幸せを運んでくれます。何よりSちゃんがパパ・ママと呼べる存在なしに成長することを想像すると胸が痛み、自分たちも体力をつけて頑張ろうという思いになります。

里親という選択は、生活を大きく変え、確かにハードルも高く感じるかもしれません。もし里親は難しいと思われる方も、まずは社会的養護が必要な子どもたちの生活を知り、そして、その心を想像してみしてほしいと思います。自分のできる範囲で手を差し伸べることも社会貢献の一つと言えるのではないのでしょうか。今はまだ社会的養護や養育家庭といった言葉も知らない人が多い世の中ですが、たくさんの人に情報が行き渡り、1人でも多くの子どもが家庭という生活の場を経験し、その温かさを胸に社会へ旅立ってくれる日を願って、私もこれから子育てを頑張っていきたいと思います。

1 2 子供が自分の頭できちんと考えられるようにすることが子育ての目標

発表者：里親（50代女性）／里親歴：7年

家族構成：里親、委託児童（小3の男の子）

現在、小学校3年生の男の子を4歳のときから育てています。とても元気で、明るくかわいい子です。毎日学校に通って、楽しく過ごしています。もともと、夫のほう調べて、児童相談所に話を伺いに行きました。研修は座学と児童養護施設での実習が2日間ありました。児童養護施設はネガティブなイメージを持っている方も多いかもかもしれませんが、実際に行ってみると、環境としてはすごくいいです。サポートがとても手厚いですし、個々のお子さんのプライバシーとかも重視されていて、すごく得難い経験だったと思います。お子さんたちもすごくかわいいですし、施設の方も一生懸命やっています。お子さんの紹介を待っている間にもいろいろな研修が用意されています。また、児童相談所でも年に10回ほど里親サロンを開催していて、勉強会やほかの里親さんとの交流でお話を聞けたり、仲良くなったりして、とてもありがたいサポートでした。ほかの家庭の里親さんを数日間預かるということもやってみて、実際にお子さんがある生活というのがどういう感じなのかという体験もしました。

児童相談所に話を聞きに行ってからちょうど1年後くらいに、当時3歳6か月の男の子の紹介がありました。初めて乳児院に行って、週3回のペースで交流し、だんだんと仲良くなっていきました。施設の職員の方と一緒に外出をして、最初はなかなか職員さんから離れなかったのですが、徐々に距離を狭めていって、ちょうど半年たったくらいのときにお泊まりを1泊から始めました。それから2泊、1週間になって、長期外泊のような感じで、実際に一緒に暮らしてみようということになりました。ところが、生活に慣れるのが結構大変で、私はちょっと体を壊してしまいました。1週間入院して、自分がいなくなったらどうしようという感じでしたが、その間、すごくありがたいことに、乳児院のほうで預かってくださり、何とか回復した後、正式な委託となりました。4歳2か月でした。5月のお誕生日には委託になるよう交流を進めていたところ、そういった事情で委託になるのが少し遅れましたが、乳児院にいる間も手厚く、いろいろな予防接種を受けさせていただいていました。

しかし、子供も一人の人間なので、なかなか最初は身内ではない人と生活するのは大変でした。私は仕事柄、取材とかで外に出ることが多くて、コロナ禍前は海外出張とかもあ

ったりして、時間を捻出するのも大変でした。最初は人見知りが激しくて、本当に仲良くなるまでは時間がかかりました。試し行動もありました。隠れたりするのがすごく好きで、今も押し入れなどの中に入るのが大好きです。わがママを言うことも、なかなか大変でした。自分で歩けるのに抱っこしないと動かないとか、人見知りが続いて、知らない人になかなか馴染まなかったということもありました。食べ物の好き嫌いも激しくて、乳児院で食事するときもちゃんと食べなかったり、食べ終わるのに1時間ぐらいかかったりしていました。夜の紙パンツが取れるまでも結構時間がかかりました。

でも、こういった中で里親を続けられたのは、皆さんのサポートがすごく手厚かったからです。一つは、「東京養育家庭の会」といういわゆる里親会です。東京養育家庭の会の支部という児童相談所管内に里親の集まりがあります。今、34人くらいメンバーがいるのですけれども、里親サロンなどを通じて仲良くなったり、お互いちょっと相談したり、意見を聞いたりしました。他には乳児院の保育士さんや里親支援専門相談員の方の支援をいただいたり、また児童相談所の児童福祉司が定期的に丁寧な訪問もしてくださりました。また、ちょっとした悩みとかも聞いてくださったりして、人とのつながりがやっぱりありがたいなということがありました。

私は仕事をしているので、本当は保育園に入れられたらよかったのですが、当時は、待機児童がすごく多く、保育園に入るのが難しいという状況でした。里親が無料で利用できる育児家事援助者派遣という事業で子供を見てもらったり、幼稚園の延長保育、それから夫の母が近くに住んでいたのを見てもらったりと、結構預け先に苦労したところがあったのですが、何とか乗り切りました。

幼稚園に入ってからはお友達ができ、社交的で明るくなって、課外活動、サッカーや体操、お絵描き、それから水泳、今はeスポーツやボーイスカウトなど、毎日のように習い事をしています。忙しいですが、楽しくやっています。健康状態もすごくよくて、大きな病気もほとんどしていません。とても優しくていい子です。好き嫌いが多く、食も細くて小柄でしたが、今は1時間に1回くらいは「お腹空いた」と言うほど、急速に大きくなり、健康的に育っています。また温泉が大好きで、よく休みの日には、温泉に泊まりに行ったり、温泉のある銭湯に入ったりすることもすごく好きです。

一般の家庭と若干違うところは、2年に1回「里親の登録更新時研修」があります。また、毎年「自立支援計画」というこれからどういう方針で養育していくかということの計画や、今養育をこんな状況でやっていますよという報告書を作ったり、経費の精算など書

類仕事は結構多いです。里親手当と必要な経費は支給されます。食費とか衣服代などの生活に該当する部分が支給されるのと、幼稚園や保育園費、給食や学校に関わる費用、医療費は原則として無料なのですが、例えばインフルエンザとかお金がかかる予防接種もあるので、そういった経費も申請すれば支給されます。コロナ禍では、子供のマスク代とか消毒薬も申請すれば支給されました。

大変だなと思うのは、子供の名義で銀行口座をつくることです。里子の場合は、受診券という保険証に代わるものぐらしか身分証明書がなく、口座をつくるのが大変でした。里親同士で情報交換して、ここの銀行だったら口座が作りやすいといったことを話したりしていますが、銀行でも制度が知られていないといったことがあります。受診券も普通の保険証と違うので、病院に持っていっても「これは何ですか」と言われることが時々ありました。コロナワクチンの接種なんかでも、実親さんの許可が必要なもので、そういった許可をいただかないとワクチンが打てないということもあります。

うちの子供の「真実告知」に関していえば、実母さんがいることは認識していて、生後5か月のときから乳児院で生活していました。「こういう実母さんがいらっしゃいますよ」としっかり説明されたのは5歳のときでした。言われたときはショックだったようで、結構心のケアが大変だったなというのを、今にして思います。小学校入学後に、「生い立ちの整理」ということで、児童相談所の児童福祉司から改めて、「生まれてから今までこういうふうにあなたは育ってきたんだよ」ということを説明していただきました。今は、実母さんから定期的にお手紙が送られてきたりしています。

私は里親をしていく上で、里親同士のつながりというものがすごく欠かせない、重要なことだと実感しています。東京養育家庭の会というのは、任意加入なので、入っても入らなくてもいいんですが、ほぼ7割、8割くらいの方は加入しています。会費が必要ですが、小学校入学のときにランドセルのプレゼントや七五三の費用を負担していただいたり、定期的にキッズニアや水族館、サッカーの試合といった招待もあって、私達も天皇杯の決勝戦を見に行ったりしました。養育家庭の会と児童相談所の共同開催でやっている里親サロンでは、里親子で定期的に顔を合わせてランチをしたりして仲良くなっています。クリスマス会や新年会、お花見、ピクニックなどの活動もあります。コロナ禍では直接会っての活動があまりできず、実際に顔を合わせることがなかなかできなかったのですが、オンラインでのおしゃべり会とか、オンライン飲み会なんかも実施したりしました。こういう仲間がいることはすごく大事だなと思います。いろいろ子育てをする上で悩んでいることや、

制度的な面でも困ったことがあったりするので、お互いに相談し合えること、一人で抱え込まないで皆さんに相談するということが、がすごく大事ななと感じています。勉強会でも、例えば発達障害のお子さんが多いということや性教育、インターネットの使い方、児童心理などいろいろ学ぶことができます。

東京都はチーム養育体制というものがあり、児童相談所の児童福祉司さん、里親支援専門相談員、今度はフォスターリング機関という支援が入ったりして、子育てというのは一人でやるのではなくて、チームとして、みんなで子供を育てていこうということを大事にしています。里親には守秘義務があり、プライバシーに踏み込んだことというのは周囲に言えないところもあります。実際には育てている子供が里子だと周囲に言っていない方や通称名を使用している方も多く、里親同士でだけで話せることはすごく大事だと思っています。また、里親サロンなどの活動を通して、里子さん同士のつながりもできて、似たような境遇だからこそ話ができることということもあると思うので、何人かで誕生会などを行ったりもしています。

今後については、いわゆる養子縁組ではないので、実際何歳まで育てられるかというのが分からないところはあるのですが、18歳で自立するとき里子さんや児童養護施設で育てている社会的養護のお子さんに向けた奨学金の制度というのがたくさんあり、返済しなくてもいい給付金が用意されています。また、児童手当といって、養育家庭に限らずお子さんに毎月児童手当が支給されているのですが、私は通帳をつくって、ずっと積み立てています。コロナ禍では臨時給付金をいただきましたが、それも使わないで全部通帳に入れて、子供の将来のために貯めています。

里親制度というのは、里親のためではなくて、里子本人の幸せのための制度なので、里子の意思というものが一番大事だと思って、子育てをしています。自分の頭でちゃんと考えられるようにすることが、私にとっての子育ての目標です。里親に対する支援は、皆さんが思っているより手厚くて、子育てをすることで、普段会うことがないような人と知り合ったり、子供を取り巻くいろんな現状を知ったり、社会との新しい接点や今までと違ったような見方をするようになったのが、良かったと思っています。

1 3 現在は反抗期、成長の証 ～どんな大人になるのか楽しみ～

発表者：里親（50代女性）／里親歴：7年

家族構成：里親、委託児童（中2の男の子）

私たち夫婦には実子がいません。私は過去に2回の流産をしまして、その後に不妊治療をしたのですが、やっぱり子供は授かりませんでした。

私は子供をあきらめていたのですが、主人は「どうしても子供を諦められない。実子がだめなら、養子をもらおう。」ということで、主人が児童相談所に電話をしました。それで、主人が「じゃあもう明日、児童相談所に行くから。」ということになり、そのときは主人のほうが乗り気でした。児童相談所に行ったところ、児童相談所の人からは「養子縁組里親よりも養育家庭を募集しています。」ということをはっきり言われて、それがきっかけで、私たち夫婦は養育家庭に登録しました。

今は中学2年生の男の子がいます。彼が家に来たのが、小学校3年生の3学期でした。

彼は、私たちの家に来るまでは、児童養護施設で生活をしていました。私たちと彼の出会いは、7年前に里親研修で私たちがその施設へ実習に行ったときのことでした。

それから1年後に、児童相談所から電話があり「Kさんに紹介したい子供がいる。」と言われました。その話を聞くと、偶然にもその子供は私たち里親研修で実習に行った施設の子供でした。私は、実習が終わってからも彼のことがすごく気になり、いつも「どうしているかな。」と気になっていたもので、とても嬉しかったです。

それから1年間の交流を経て、平成29年12月25日に、我が家に里子として彼はやってきました。私たち夫婦にとっては最高のクリスマスでした。

そこから私たち夫婦の子育てが始まり、最初はとても不安でした。毎日学校でトラブルを起こし、毎日のように学校から電話がかかってくる、いやな授業があると教室から飛び出して廊下を走り回ったり、ひどいときには校庭まで飛び出して走り回っていました。他にも友達と喧嘩をしたり、いろいろなことがありました。

私たちが彼の行動で一番困ったのが、私たち夫婦の財布と両親の財布からお金を盗って、それでカードゲームを買ったり、友達とお菓子を食ったり、いろいろなことでお金を使ったりしたことです。これにはもう本当に困りました。

また、夜になると大声を出したり、暴れたり、家を飛び出したりして、夜、外を探し回ることもありました。他にも人に唾をかけたり、人の前で平気で放尿したり、いろいろな

試し行動をしてきました。

今思うと、彼は親から虐待を受け、4歳で児童養護施設に預けられ、私たちの想像もできない体験をして、それだけに大人を信用するということができないのだと思いました。私たち夫婦も彼も、最初はどのようにしていいかわからないので、大勢の人に協力をしてもらいました。

彼がこの家に来て1年が経つ頃、私の体に異変がありました。それは、健康診断で私に乳がんが見つかったことです。早期だったため、手術と抗がん剤治療をしましたが、抗がん剤治療の副作用で髪の毛が抜けてしまいました。彼がそれを見て、「おばちゃん、俺の髪の毛を切ってあげるからな。」と言ってくれました。そのときは本当に涙が出るほどうれしかったです。

彼は勉強は嫌いだけど、友達がいるから学校に行くという感じでした。毎日学校が終わると、友達の家に遊びに行ったり、友達を家に連れてきたりしました。友達を連れてくる時は5人から10人連れてきたので、まるで家の中が児童クラブか児童館かと思うくらいでした。そのとき、私は初めて、子供のパワーはすごいと思いました。家の中がとても明るくなりましたし、私自身も彼と彼の友達にはパワーをもらいました。

そんな彼が、私と主人に、「俺は、生まれる前からこの家や、おじちゃんやおばちゃんのことを知ってたんだよ。見ていたんだよ。」と言い始めました。そこで、「どこで見ていたの。」と聞いてみたら、「遠いお空の上から見ていたんだよ。」と言いました。「お空の上にはね、穴がたくさんあって、その穴からこの家をのぞいて見ていたんだよ。施設も見てた。施設も楽しそうだったので、施設に寄り道をしてからこの家に来たんだ。この家に来たかった。このことは本当だよ。」と話してくれました。それを聞いたとき、「里子も里親を選んで生まれてきてくれるんだな。」と思いました。

今は反抗期の真っただ中で、何か言うと「うるさい」と言われる毎日です。暴言を言われるのはつらいですが、心も体も子供から大人に成長する時期なので、当たり前と思っています。子育ては大変ですが、楽しみもたくさんあります。大勢の人に助けていただき、そのおかげで大変な時期を乗り越えることができました。彼のおかげで私たち夫婦もいろんな体験をさせていただき、学ぶことができました。この家に来てくれてありがとう。これからもよろしくね。

1.4 里親になって私たちの人生は豊かになった

発表者：里親（50代女性）／里親歴：22年

家族構成：里親、委託児童（長男26歳（自立）、次男18歳、三男小4、長女小3）

現在、3人の里子と生活をしています。長男は現在26歳になり、私の実家近くの祖父母のところに住んでいます。次男は3歳で我が家にきてもうすぐ19歳になります。美容師を目指し専門学校に通っています。三男も3歳の誕生日前に来て今小学校4年生、その実妹が年中さんで来て今小学校3年生になります。

私が里親になったのは、結婚6年目くらいでした。友達が子育て期に入った頃、通勤電車の車内広告で里親やフレンドホームのポスターを目にし、はじめは「まだ子供ができるかな」ということもあって「フレンドホームをしたいな」と説明を受けに行きました。その中で里親制度についても教えてもらい、「ぜひ、やってみてはどうですか」ということで里親登録をしました。そのときはフルタイムで仕事をしていたので「登録してもすぐお子さんが決まるかどうか分かりません」と言われ、のんきに構えていたのですが、登録と同時に長男の里子を紹介されました。私は忘れもしないのですが、電話がかかってきたとき主人が嬉しそうに、私の名前と一文字漢字が同じなので「何か、運命を感じる」と言い、じゃあ会ってみようということになりました。当時4歳の長男は、目がくりくりしていて、口をいっぱい開けて、笑顔がとてもかわいい子でした。最初は施設に行っただけで数時間会うことから始め、その後半日。1日家に来て、夜帰す。それから1日、2泊まると、どんどん交流の日がちが増えていきます。祖父の運転で連れ帰った時、施設の玄関から子供がささっと走って戻ってきて、車のドアを開けて、祖父の膝の上に座って動かないことがありました。「今日は帰して。私、明日仕事なのに」と思ったのですが、それを見た施設の先生が、「こんなになついているなら、今日もお泊りに行っていいですよ」と言われて、そのまま連れて帰って2、3日過ごしてから帰りました。この出来事で、この子の里親になろうと決めました。子供が求めているなら、気に入ってくれているんだったら、家で生活してみよう。一緒に生きていく。里はつくけれども親子としてやってみようということを決めました。

施設にいる幼児さんは、実親さんが長い休みのときには自分のお家に帰るようなこともある中で、いつも彼は残ってしまっていて、施設の先生の家で連れて帰るといったことを当時はされていたのですが、ちょうど彼が「パパ・ママって何」という頃に私たちが

現れたので、すぐに私たちを「パパ、ママ」と呼んでなついてくれました。そんなことで余計にかわいさが増し、スタートを切りましたが、そのあとはやっぱりいろいろな試し行動をするようになりました。幼稚園ではわがままを言ったりしなかったのですが、家ではよく、気に入らないことがあると施設で過ごしていた部屋の名前を言って「僕は荷物をまとめて帰る」と言い、家出をしていました。私が後をついて行くのを知っているの、近所の八百屋のおばさんに「また家出してるの」「大きな荷物持ってどこ行くの、また出てきちゃったの」と言われながらも、「ママがもうすぐ迎えにくるから大丈夫なんだよ、きっと隠れてるよ」と言っていたことを聞いて、もううちの子なのかと、家にいていいんだということは心に根づいてきているのかと思った記憶がよみがえります。その後は、里親の先輩に「3か月、1年、3年したらもう家族だよ」「子供の方で家族に入って行くよ」と言われたことを糧に頑張ってきました。確かにそのとおりで、3か月したら落ち着き、1年した頃にはもういて当たり前、3年後には一番大きな顔をしていました。他の3人の子供もそのようなふうになつています。

子供が悪いこととか危ないことをしたとき、主人は部下を叱るように「君はね」と声をかけていました。すると「パパ、黄身は卵の中に入っているんだよ、分かっている。」と言われ、「ああ、伝わらないんだ」と悩んだことがありました。児童相談所の方や、ベテランの里父さんからいろいろアドバイスをもらい、それ以降は、パパとしていろんなことを子供に楽しく接するようになりました。ちょうど年齢的に中間管理職で朝早くて夜遅く、子供が「パパは帰ってきたのか」と言われるくらいのころの出来事だったので、極力時間を取るようにもしてくれました。そんなことがあり、私も里親さんの集まりには出て「そうだよね」、「何でうちの子はこうなんだろう」ということを話すようになりました。困り感はたくさんありましたので、「それ大丈夫だよ、いつか落ち着くから」と里親さんの先輩や仲間の方に言っていただき安心したりしました。そのあと、長男が思春期に入る少し前に、次男を弟として迎え入れることになりました。やはり小さい方に手がかかるので目が行ってしまい「僕も見て」ということに対しても、先輩の里親さんに相談して「リップサービスが大切よ」と言われ、「あなたは大事、あなたが一番」ということをやってみました。二人で沖縄旅行に2泊3日で行ってそこで修復し、楽しい思い出をして帰ってきました。それからは弟をすごくかわいがっていたのですが、こういうことは、二人目ができた普通のご家庭と同じようなことかなと思います。

中学時代が一番大変でした。普通にいらいらする思春期である上に、彼の言葉をそのま

ま言う。「親に捨てられた」ということがすごく引っかかっていたようです。「何だか分からないけどいらいらする」と言っでは壁に穴が開くので、私は彼の写真を大きくコピーしてその穴に貼り何年か過ごしていました。壁に穴をあけるのは里子じゃないご家庭でもあるとママ友に聞いてもいたのですが、「本当の親じゃないくせに」とすぐ言うようになってしまいました。私は「だから何なの」と言うしかなく、彼からは、「生んだ親に捨てられた気持ちが分かるのか」という言葉を投げつけられました。でも、ここでひるんじやいけないと思い「私は、生んでくれた親に育てられているので、その気持ちは申し訳ないけれど分からない」と突っぱねました。そうしたら黙ってしまって、そのあとおじいちゃん、おばあちゃんを通じて「そこまで言う必要はなかった」と謝ってくれました。大きくなってからも、「あの時にぱつと言われて、でも本当のことだからしょうがないよね」ということを言ってくれました。いくら飾って嘘をついて、言葉できれいに流してしまってもあとあと残ると思いましたので、主人と里親を始めるときに一つだけ約束をしました。それは、子供には絶対に嘘をつかないでいこうということ、ごまかしはするんですけれども、致命的な嘘はつかないということでやっています。子供には、自分が里子で、実の親御さんと生活できなかったことを事実として受け止め、自分で乗り越えてもらわないといけない。里親ですので何とかしてあげたいのですが、事実は変えられないので、そこを受け止め、乗り越える寄り添いしかできないのです。長男は26歳になっても、その点はままだもやもやと持っているようです。私は長男に「もう26なんだから結婚しなよ」、「早く結婚して落ち着きなよ」と言っていますが、長男は「親になる自信がないからいやだ」、「結婚はしない」と言っています。ですが、最近、夫には「ママとパパだってあと30年生きれば御の字じゃない」と言い、夫から「1人になっちゃったら寂しいよ」「自分の家族がいるというのは、生きていくうえで糧になるよ」と言われるというような会話をしていました。大人になったなとも感じています。生い立ちについての悩みは、自分が家庭を持ってきつと付きまとう、ずっと考えさせられる、埋められないということ、大きくなってからひしひしと伝わってきます。ごめんなさいとは言わないですけども、「どうにもしてあげられないんだよね」、「生んであげられればよかったね」と言います。そんなことで、彼たちの気持ちをごまかしたりもしています。

どの子も幼稚園になると、お友達のママのおなかが大きくなって、弟、妹ができたというのを見たりするので、「僕るときはどうだった」「私るときはどうだった」と必ず聞かれました。そこは嘘をつかないということで、「生んでないから分かんないよ」というこ

とを言うんですが、下の子たちはお兄ちゃんたちからも「ママ生んでないから知らないよ」と言われてしまい、「そうなんだ」ということで終わってしまいます。それでも成長するにつれ、だんだんと長男のように、自分の出自について「じゃあ親はどうしているんだ」、「何で育てられなかったんだ」と私たちに聞いてきます。次男からも「俺を生んだ親はどこにいるんだ」と言われ、「私は知りません」、「児童相談所の方が、いろいろ知っていらっしゃるのので聞いてください」と電話番号を渡してあります。長男はいまだに、「別に知らなくていい」、「知りたいときに調べる」と言っています。次男はもう少ししたら多分兄相に電話して聞くのだらうなと思っています。彼は「何でだろう」ということをすごく強く思っているけど、「うちで里親子になって別に文句があるわけではない」ということもつけ加えてくれます。

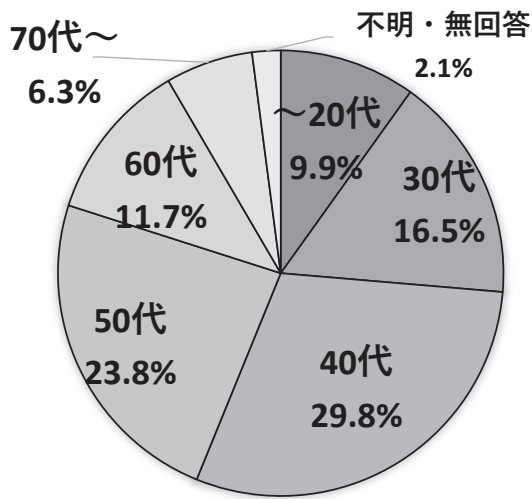
小学校に上がると生い立ちの授業があります。施設の先生にいろいろと家に来る前のエピソードを聞いて書いたり、施設からもらった写真をコピーしたりして授業を乗り越えてきました。一番神経を使うところですが、今は、いろいろな家族形態があるので、最初の長男のときより全然楽になってきています。昔は「お母さんのお腹に宿った時に、おじいちゃんたちとか家族は何て言いましたか」という質問があったんですけども、今はそんな質問はありません。「社会的養護」という言葉も認知されてきて、22年前に比べると里子たちも少しずつは生きやすくなってきていると思います。それぞれの子供たちに生い立ちの整理の冊子を作るのですが、授業が終わってから、施設の先生にお願いしてコメントをいただいていたりもしているので家を出るときには持たせてあげようかなと思っています。それだけいろいろな人があなたたちのことを思っていてくれるのだよ、楽しく生きていくことは大事なんだよ、1人じゃないんだよということを知ってもらいたいです。4人とも生んでくれたお母さんの顔を思い浮かべられないんですね。それって空虚感というか、生きていく上で根っこの部分が揺らいでしまうことなんだろうなと思います。それに代わるものを一生懸命作ってあげたいなと思って生活をしています。家庭というところを少しでも知ってもらえればいいなと感じています。どこかで実親さんに会えるといいねということを思っている一方で、小さいときからずっと一緒に生活しているので、突然現れたらどうしようという気持ちもあり、そんな葛藤をしながら、里親生活を続けています。里親をやっていてよかったなということは、もちろん子供たちに出会えたことと、主人と2人で生きていくよりはるかに豊かになっていること、いろいろな人に出会い、教えていただいたこと、協力して子供を育てるといふようなところだと思っています。

体験発表会アンケート結果

全回答 N=1,368

1. 体験発表会参加者について

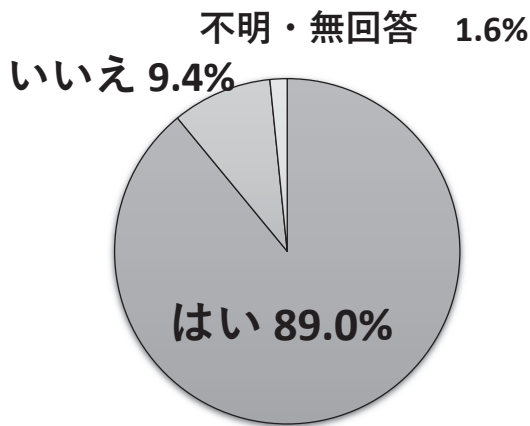
(1) 年齢構成



(2) 所属 (一部複数回答有) (単位：人)

一般	550
民生児童委員	64
主任児童委員	39
養育家庭（里親）	117
フレッドホーム	11
都職員	34
区市町村職員	160
施設・関係団体職員	204
学生	58
その他	91
不明・無回答	42

2. 養育家庭制度を知っていましたか？



3. 養育家庭制度を知った経緯

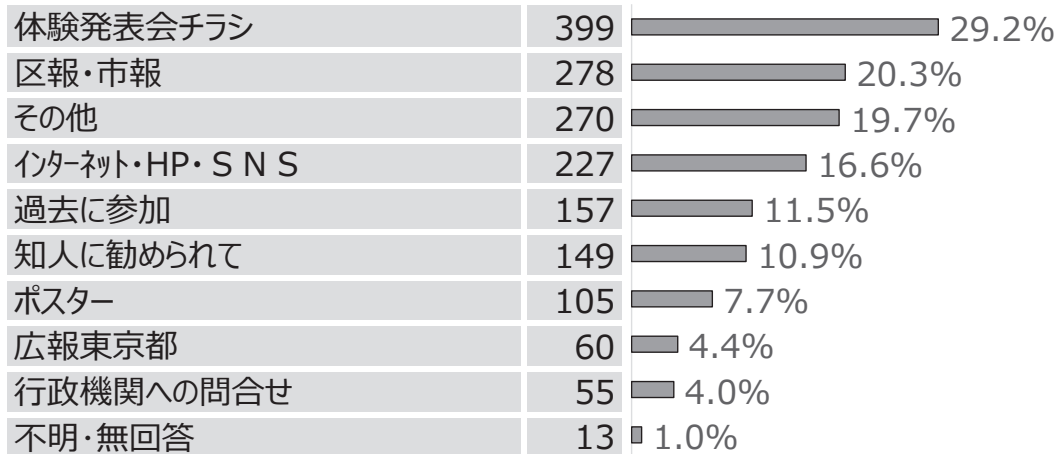
(複数回答可)

経緯	人数	割合
行政による広報誌・HP	354	25.9%
児相・子ども家庭支援センター	345	25.2%
インターネット・SNS	297	21.7%
その他	218	15.9%
児童福祉施設	209	15.3%
ポスター	183	13.4%
テレビ番組	181	13.2%
知人・友人	136	9.9%
公開講座	107	7.8%
新聞・雑誌	99	7.2%
図書	64	4.7%
不明・無回答	49	3.6%
テレビCM	36	2.6%
ラジオ	15	1.1%

4. どこで、体験発表会を知りましたか？ (複数回答可)

(単位：人) 0.0%

50.0%

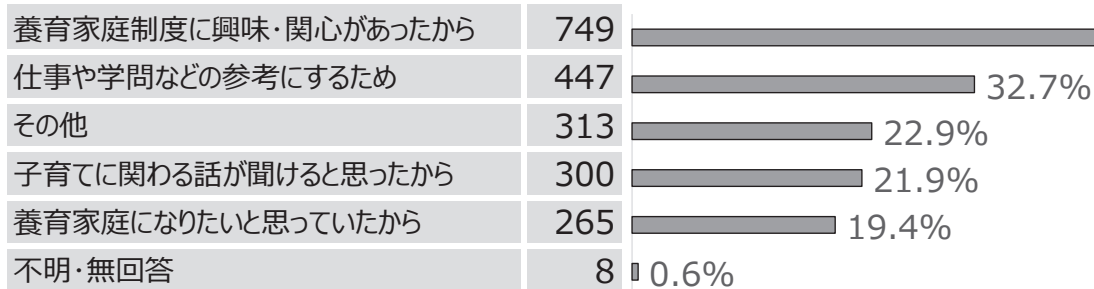


5. 今日の体験発表会に参加した動機をお聞かせください。 (複数回答可)

(単位：人) 0.0%

50.0%

54.8%



6. 体験発表会の感想をお聞かせください。

里親さんや里子経験者の生の声を聞くことがたいへん良かったと思います。
ご本人の経験談とともに具体的な感情としてどう思ったかなど、大変参考になりました。
(40代、一般)

里親になることの具体的な苦しい側面の話が聞けてとても良かったです。
周囲のサポートがしっかりあることも知れて良かった。体験発表されたお二方がとても
良いお顔をされているのが印象に残りました。(30代、一般)

里親さんが子供たちに寄り添い接する姿がとても伝わった。制度についてもわかりやすかった。
ありがとうございました。(50代、一般)

普段聞くことのできない実際に里親をしている方のお話を聞くことができ、とても勉強になりました。
里親により興味がわき、将来自分も里親になることを考えてみようと思いました。
(20代、学生)

ご参加いただきまして、ありがとうございました！

養育家庭（里親）は、様々な理由で親と一緒に暮らすことのできない子供たちを、養子縁組を目的としないで、家庭に迎え一緒に生活し、養育していただく制度です。

【養育家庭（里親）を、詳しく知りたい。】

◆養育家庭（里親）になるにはどのような資格が必要ですか？

- 都内在住の夫婦（※）で健康な方

配偶者がいない場合は、子供を適切に養育できると認められ、かつ起居を共にし、里親の養育支援者として子供の養育に関わることができる、20歳以上の親族等がいること。ただし、子供を適切に養育できると認められる特段の事情があるときはこの限りではありません。

※ 事実上婚姻関係と同様の事情にある方や、同性パートナーも含まれます。

- 申請者の家庭及び住居の環境が、家族の構成に応じた適切な環境が必要です。

※ その他詳しい要件は、お住まいの地域を管轄する児童相談所にご確認下さい。

◆どのような子供を預かるの？

- 親の病気や虐待等の理由で、親と一緒に暮らすことができない、おおむね18歳までの子供です。

◆預かる期間はどれくらいですか？

- 養育期間は数年にわたる場合もあれば、数か月の場合もあります。
- 短期間（おおむね1か月以上2か月未満）のみ預かる養育家庭もあります。

◆養育に係る費用は支払われるの？

- 子供の年齢に応じて、生活費や教育費等が支給されます。
- 養育家庭（里親）には里親手当が支払われます。

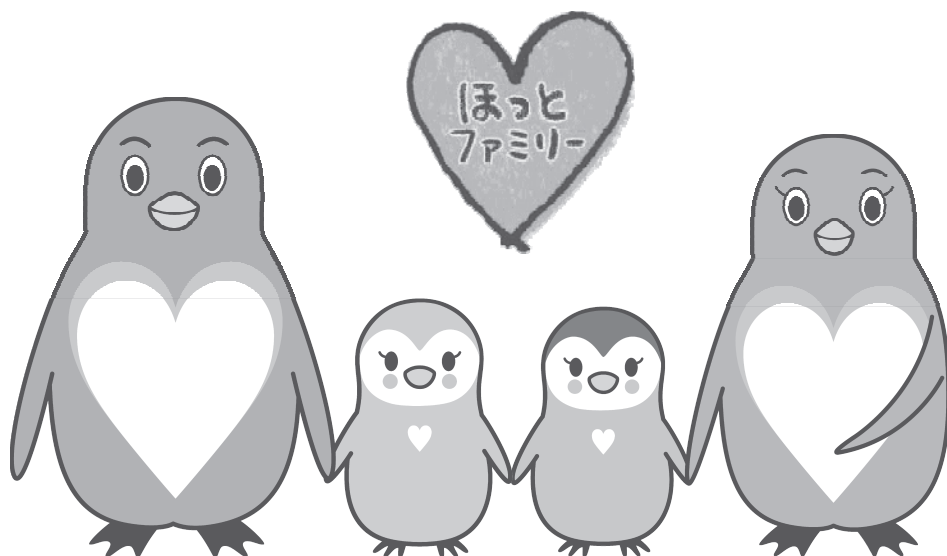
◆養育に必要な支援はどのようなものがありますか？

- 児童相談所が中心となって関係機関と共に支援を行います。
- 里親自身の休息が必要な場合には、子供の養育から一時的に離れて休息できる制度があります。
- 里親同士が集う相互交流の機会があります。
- 経験豊富な里親が電話等で相談に応じます。
- 研修などに参加し、養育に必要な知識を学ぶことができます。

【養育家庭制度に関するお問合せ先】

東京都福祉局子供・子育て支援部育成支援課里親担当
〒163-8001 新宿区西新宿二丁目8番1号
電話 03-5320-4135

ほっとファミリーは養育家庭の愛称です。



Tokyo 里親ナビ
—子どもと里親の暮らしを知るサイト—
<https://tokyo-satooyanavi.com/>



里親ナビ



養育家庭(里親)体験発表集
令和5年9月発行

登録番号 (5)20

発行 東京都福祉局子供・子育て支援部育成支援課
東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話03(5320)4135 ファクシミリ03(5388)1406
印刷所 東京都同胞援護会事業局
東京都墨田区両国四丁目1番8号
電話03(5669)0261



古紙配合率70%再生紙を使用しています
石油系溶剤を含まないインキを使用しています

リサイクル適性[®](A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。